

---

# 超能力者の仕事は・・・執事！？

神威メルブラ勢

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

超能力者の仕事は・・・執事!?

### 【Nコード】

N8523E

### 【作者名】

神威メルブラ勢

### 【あらすじ】

超能力が発現した地球を1人の男がいくえ？その男は誰だつて？もちろん超能力者です!!!彼の見つけた仕事、ソレは執事!?!え？彼は地球の人間ではない!?!異世界の超能力者!?!そんなノリで始まるお話でございます・・・キーワードは超能力、執事、ほのぼの、です。あ、もしかしたら恋愛要素も入れるかも・・・。http://www.webstation.jp/syouseituprank.cgi?mode="rlink&id="3961

## プロローグ(前書き)

コメディ好きです。

基本的に飽きっぽいかも・・・。^^;

温かい目で見守っていただければ嬉しいです。

出来れば投票お願いします

```
http://nnr.netnovel.org/rank08  
/ranklink.cgi?id=shadowX
```

## プロローグ

### プロローグ

ある時、ある場所にて・・・

「隆、私達は他とは違う・・・。  
この能力は決して認められることはないわ・・・。  
それでも・・・、それでもあなたはここを出ると言うの・・・？」

そこには2人の男女が存在した。

1人は執事服のような物を着た20歳前後の男、もう一人はどこかの高校の制服を着た少女。

「俺たちは常に共に過ごしてきた・・・。  
ソレが我らの能力が引き合っていた為なのか、我らの意思だったのかはわからない。  
だがこの能力が他と一線を欠く事だけは理解している。」

男は言った。

それは自身の存在を悲観したような、哀しげな声だった。

「なら！

私とこれからもこの世界で行きましょうよ！

そうすれば少なくとも私はあなたと同じ。

私たちが共に在った理由なんてどうでもいいじゃない、私はあなたと共に生きたい。

それだけは確固とした私の意志よ！」

少女は声を荒げて言った。

少女の眼には涙が浮かび、今にも男に飛び掛っていきそうな、そんな切羽詰った反応を見せる。

「だがそれでも俺は、その世界で生きてみたい。

お前ならこの世界を任せても大丈夫だろう……。

俺は『地球』と呼ばれる世界へ行こうと思う、能力が開花して日の浅い世界へ……。

自分を能力者としてではなく、一個の個人としてみてくれるであろう世界へ。」

男はそんな少女を温かな眼で見つめながら、しかし口からは否定の声を上げる。

「一つ、頼みがある。」

男は言った。

「この世界を頼む、というつもりは無い。

だがこの、この指輪だけは常に持っていてほしい。

いつか必ず助けになるときがくるだろう。」

男はそういって、自らの指につけていた指輪を一つ、少女の細い指に指輪をつけた。

「……、これは？」

少女はかすれ声でそう言った。

「時がくれば、わかるだろう……。」

「俺がない間のこの世界だが、別にお前が治めなくてもいい。さつきはああ言ったが、お前を束縛するつもりはない。」

お前ならこの世界を治めることは容易いだろう、だが俺はソレを勧めるつもりはないし、出来ることなら自らの意思で自らの道を歩いてほしい。」

男はそう言つて、闇の中へと消えていった……。

そして少女は……。

「なら、なら何をしてもいい、ということよね……？」

私があるたと共に在った理由は何も能力が似ているからだけではな  
いってことを教えてあげる……。」

そついいながら、少女もまた、闇の中へと消えていった……。

なんかとても重い印象を受けちゃいました？^^；

でも1話からはコメディ、になると本人は考えているので、できれば楽しみにしてください。

## ブローグ（後書き）

```
http://www.webstation.jp/syou  
etu/rank.cgi?mode=rank&amp;:  
d=3961
```

出会いは唐突に。或いは男と共に。

## 第1話

『 出会いは唐突に。或いは男と共に。 』

(この第1話は第3者視点でお送りいたします。)

「・・・ここが、地球、か。」

男がいた。

都心も都心、大都市の真ん中に男がいた。

男は執事服のような服を着、手には白い手袋をはめている。

7

(ふむ、これからどうするか。

能力がある世界とはいえ、あまり本気は出さないほうがいいな・・・)

男は考える。

(あまり目立たない能力、それでいて使い勝手がよく、この世界で職としてつかえそうな能力がいいな。)

そう自身の思考に没頭していた男だが、唐突に聞こえてきた声に強制的に現実に戻された。

「おい、キミ、すまないがココがどこだか教えてくれないか？」

声に引かれ顔を向けると、目の前には見た目30歳前半の男が立っていた。

男はスーツに身を包み、手には高価そうな鞆を持っている。

「……すみません、私も先ほどここにきたばかりでして、ちょっと場所まではわかりません。」

そう男――執事服を着、白い手袋をはめた――は言った。

「なんだ、そうなのか。」

それはすまなかった、だがどうするか……。

急いでいるんだが迎えの車が来ないのだよ……。」

男は心底困ったかのようにそう言った。

「……すみません、力になれなくて。」

私もこれから職を探そうかと思っっているんですが、どこでどうすれば職を見つけれられるのか、さっぱり見当がつかないもので、どうしようか悩んでいたんです。」

男は答える。

「キミも困っている側の人間か……。  
まったく、どうしたものか……。」

そう言った声を境に、会話が途絶える。  
スーツに身を包んだ男と、執事服を身に纏った男はただその場に佇む。

「そうだ。」

キミ、一ついいかね？」

男は何かを思いついたかのようにそう言った。

「はい、なんででしょう？」

執事服の男は少し戸惑いの混じった声でそう言った。

その反応に気をよくしたのか、いたずらを思いついた少年のように表情を崩しながらこういった。

「キミ、職は私が提供しよう。」

だからキミは私が望む場所へ行く方法を探してきてくれないか？」

執事服の男の顔が驚きの色に染まる。

その表情を見て男はさらに顔を崩す。

「……それは、私に職を提供する代わりに、あなたの目的のために働け、ということでしょうか？」

男が気を取り直して答える。

「まあ、そういうことだ。」

どうだね？」

悪い話ではないだろう？」

「……確かに、それが事実であるならば、ですが、  
で、どちらまで行きたいのです？」

先ほども言いましたが、私は地理に明るくないので、あまり役には  
立たないと思いますよ。」

「大丈夫、とはいえないが、キミは能力者だろう？  
その能力で何とかならないのかい？」

見たところ、移動系の能力のようだが。」

男は平然と言う。

「・・・何故私が能力者だと思いで？」

男は訝しげな表情でそう言った。

隠そうとしているようだが、少し動揺の色が見え隠れしている。

「なに、簡単なことさ。」

キミはこの辺に来たばかりだといった、だが着たばかりの人間がこのあたりの地名すらわからないというのは些か変だ。

故に能力によつてこの地に来たのではないか、と考えたのだよ。

その反応を見るにどうやら正解だったようだね？」

男は顔を崩しながらそう言った。

「・・・なるほど、あなたも能力者のようだ。」

普通あの短時間でその結論に行き着くのは早過ぎる。

大方、時間系、それも自身に干渉する能力のようですね。」

「ほう、思ったより認めるのが早かったね。」

それと、確かに私は能力者だよ。」

この短時間でそれを見抜いたのはキミが初めてだよ。」

執事服の男は能力によつてそれを知ったのだが、それを知るはずも無い、そして執事服の男の能力を移動系だと考えていた男はそう言

った。

「ええ、お褒めに預かり光栄です。  
いいでしょう、職をいただけるのなら私がそこへとお連れいたしま  
す。」

執事服の男は軽く礼をしながらそう言った。

「おお、本当かね？」

私の名は『黒崎 清』」

そついいながら右手を差し出す。

「なるほど。」

私の名は『逆神 隆』、短い間ですがよろしく。」

そついいながら隆と名乗った男は右手を握る。

黒崎と名乗った男は、

「ああ、とりあえず急いでくれ、時間が無い。」

そついいながら隆の手を握り返す。

「わかりました、ではどちらまで？」

「そうだな、取引会社の会議室まで、だ。」

我が社の者がもう行っているはず・・・、急いでくれ。」

黒崎と名乗った男は、そう、言った。

この瞬間、隆のこの世界での能力が決まったのだった。

**衝撃の事実と共に 或いは引力と共に 前（前書き）**

引力云々って部分は前編では出てきません・・・。^^；  
後編にちよこつと出る程度になるかも知れません。

なかなか話が進まないもので・・・。

温かい目で見守っていただければ嬉しいです。

あ、でも今夏だから暑いのはやだなあ・・・。

## 衝撃の事実と共に 或いは引力と共に 前

第2話 『 衝撃の事実と共に 或いは引力と共に 』

(ここからは隆視線で話を進めていきます。  
初めての試みなんで温かい目で見守っていただきたいと思います。)

「ところで、キミの能力は何なんだい？」

現在、俺と黒崎と名乗った男は握手をしている。

その状況でこの質問は些か変だなー、でもこの世界を知っているわけではないし……。

これがこの世界での平均的な反応、とか言わないよね？」

「ちなみに私の能力は時への干渉だよ。

自身限定で流れる時間を操作できる。

先ほどの自身に流れる時間を早め、思考時間を長くしたのだ。」

だが男は何の問題もない、というようにそう言う。

そして先ほどの質問の答えを俺に求めるのだった。

ほんと、この人のことを信じて本当に大丈夫なのか？

まあ、俺には答えるしか選択肢はないんだが。

というか自身だけが範囲かよ、やはりまだまだ幼いんだなー、この世界の能力の発現が。

「私の能力は『空渡り』と自身では呼んでいます。」

いわゆる空間転移でしょうか？

自身の認めた物質を任意で転移させる能力です。

自分自身を転移させることも可能です、先ほどもこの能力で移動したところだったんですよ。」

と、俺は言う。

まったく、本当はそんな能力が俺の能力だというわけではないんだがな。

とはいえ、本当の力は強過ぎる。

下手に使うべきではない、か。

正確には自身の能力のごく一部である、俺はすごいんだぜ。

「と、本当に時間が無くなってしまいそうだ。

悪いがこの場所へ連れて行ってくれ。」

そう言う黒崎と名乗った男の手には地図らしき物が。

おいおい、それがあるならそれで確認すればよかつたんじゃないのか……。

……まさか、地図が読め、ない？

まさか、な……。

「はっはっは、今キミの考えただろうことだが、おそらく事実だよ。私は地図という物が苦手だね。」

何っ!？

まさか本当に読めないのかよ……。

なんか見た目仕事できそうな感じなんだけどなー。

人には苦手なことがあるからなんともいえないけど……。

「どっです？」

・・・・ああ、ココですか、なるほど。  
座標さえわかれば転移できますので何とかあります。  
ですが転移できるのはあくまでビルの前までですよ？」

こればっかりは仕方が無い。

下手にビル内に転移させると壁の中に転移したり、人の上に転移してしまう。

後者ならまだいいが、前者なんてことになったら目も当てられない。  
もっとも、詳しい写真とかがあればできるんだけどね。

・・・・もしくは本当の能力を発動させれば。

・あれは反則みたいなものだからな！。

「なぜかね？」

・・・・ああ、詳しい転移はこの平面の地図だけでは難しいんだね？

・確かに危ないことはやらないほうが懸命だな。

・ではビルの前まで転移してくれ。」

「わかりました。

では私の手を離さないで下さいね？」

ふう、よく考えてみればこの世界で力を使うのは初めてだな。

もっとも前の世界とほとんど勝手は変わってないけど。

「ふむ、触れていないといけないのかな？」

いや、十分能力としてのレベルは高いのだが・・・、頼むつもりの  
仕事には少し不便かも知れんな。」

ん？

これは俺をなめてるのか？

いいだろう、見せてやろうじゃないか。

・・・ってか何で俺は握ってる、なんて言ったんだ？

「いえ、そう言うわけではありませんが。

はじめて転移をする人はすぐに転移するととても驚くもので、  
なにかきつかけがあるほうがいいみたいなんですよ。」

「ああ、そういうことが。

ではそうしておこう。」

なんだ、本当に純粋な疑問だったのかよ。

・・・あ、こんなことしてる暇ないんだっけ？

「ではいきましょう」

。そう俺がいうと、次の瞬間にはその場に俺たちの姿は無かった・・・

・  
・  
・  
・  
・

ブンッ・・・

一瞬、その場に音が響く。

それは俺たちが転移したときの音。

なぜか昔から転移の際、この音だけは消すことは出来なかった。

「ほう！」

これはとても便利だな！

気に入ったよ！

なんとか取引に間に合いそうだ、ありがとう。」

男が興奮気味に俺に話しかける。

ふっ、どうやら俺のすごさがわかったようだな・・・、もっとも、この程度どうとでもなるが。

「いえいえ、ギブ&amp;mp・テイクですよ、私にも見返りがあるんですからお気になさらず。」

そう俺が言う。

俺のモットー、男は常に紳士であれ、は如何なる相手にも適応される。

・・・俺が認めた人間だけではあるが。  
え？

如何なる相手ではないじゃないかって？  
さーて、なんのことかな？

「さて、では私は少し失礼するよ。」

キミはココの受付に私の名を出せば部屋に通してもらえるようにしておくから、そこで待っていてくれ。」

「・・・わかりました。」

男の声に些かの疑問を抱きながらも、俺はそう言った。

男は俺のその反応を見ると、足早に奥へと消えていった。

その後、俺は受付に部屋へと案内されて、ビル内部へと足を踏み入  
れた。  
.....

衝撃の事実と共に 或いは引力と共に 後

第3話『衝撃の事実と共に 或いは引力と共に 後』

「こちらが、社長の個人ブースとなっております。  
こちらの部屋はご自由にお使い下さい。  
そう社長がお伝えしると仰っております。」

あの後、俺は受付の呼んだ案内係に部屋へと通されていた。  
案内された部屋は、人目でホテルの一室かと間違えるほど豪華な造りをしていた。

「ありがとうございます。」

あの、先ほどの男性はどれぐらいでココに来れるかわかりますか？」

「いえ、私は案内係ですので、残念ながら存じておりません。  
そちらの電話は受付への直通となっておりますので、受付へお聞き  
いただければわかると思います。」

案内係の女はそういった。

「そうですか。」

ありがとうございます。」

なるほど、やはり清は社長のようだ・・・。

俺は思ったよりも大物に気に入られたようだな。

「では、失礼いたします。

何か御用の場合は先ほどの電話で受付へとご連絡下さい。」

そういうと女は足早に、しかし優雅な足取りで扉の向こうへと消えていった。

「ふう、どうやらココでしばらく待機か。

にしてもあの清が社長だとは……。

面倒なことにならないければいいが……。」

俺は誰もいない部屋でつぶやくようにそう言った。

誰もいない部屋、つまりそれに返事を返すものは誰もいない。

「……そう、いない、』はず』だった。

「ふーん、あなた、誰？」

そう、唐突に部屋に女の声が響く。

その声は女性、というにはいささか幼い声色をしていた。

「……そう言うあなたはどなたです？」

俺はそう動揺をまったく見せないように言い、ゆっくりと振り返る。

目の前には17、18程度の少女が佇んでいた。

小さな顔に大きな瞳、腰まで掛かるうかという黒髪。

その髪はサラサラのストレート、黒い、そう漆黒という名が最も似合いそうな黒。

手には細かな細工のはいつた指輪をしている。

どうやら装飾品としてつけているモノのようである。

おいおい、誰もいなかったんじゃないのか？

そう、俺は心の中でつぶやいた。

それを口に出さなかったのは彼女の右手に、いや、正確には右手の上に浮かぶ1本のナイフを見たからだ。

「誰かと聞いているんですけど？」

少女はさらに脅すかのように再度言った。

最初より幾分声を低くして。

「・・・私は、逆神 隆（さかがみ りゅう）

ある男性にココにいるよう言われたんですけど・・・。  
突然脅される覚えはありませんが？」

俺はそっぴいながら若干キツめの目線を少女へと向ける。

「・・・男？」

・・・完全に後半はスルーかよ。

なんか、お転婆お嬢様って感じだな・・・。

「ええ、黒崎 清 と名乗っておられましたか。

この会社で現在、会議に出席されているようです。」

俺はあくまで余裕を見せながら、そういった。

こういうヤツを相手にするのは哀しいかな、慣れている。

「・・・お父様か。

なるほど、新しく雇われた執事、ってどこかしら？

まったく、使える者以外は雇わないで、と言ってあったのに・・・。

「

少女はもう俺の話を聞くつもりはないのか、一人、思考の世界へとはいつていく。  
かといつてどこかに座るわけにもいかず、俺はその場に立ち尽くした。

つて、あの清の娘かよっ!?

言われてみれば美形だな、オイ。

あ、ちなみにココが衝撃の事実だからな?

変に期待しても何も出ないからな?

つと、少し気が立っていたようだ。

まったく、この女が話を聞かねえからこうなるんだ……。

はやく戻ってこいよ!

そう、俺は心の中で叫び続けた……。

どれだけ時間がたっただろうか。

5分、いや、1分程度だったかもしれない。

とにかく少々の間、一人思考の世界へと意識を飛ばしていた少女は唐突に顔を上げた。

「いいでしょう。」

あなたが本当に使える者なのか、テストをして差し上げましょう。」

おい、俺はテメエの親父に連れてこられたんだよ。

だいたい、話がこじれている、どうにか戻したいところだが……。

「ちょっと待つて頂けますか？」

私はそのテストとやらを受ける必要性を感じません。

私はあなたのお父様、清さんにここで待つよう言われているのですから。」

俺はそう告げる、無論それは正論。

普通なら、誰もそれに反対することは不可能、なはずだった。

そう『普通』ならば。

「何を言ってるの。」

あなたが使える人間であるかどうか、私はテストする必要があるのよ。

私が認めない者は決して雇いはしないのだから。」

少女はそう言った。

少女は自信家だった。

自身の力を信じていたし、誰にも負けないという自負もあった。

俺の琴線に触れる程度には。

「いいでしょう、そのテストとやら、受けさせて頂くようではありませんが。」

で、どのような内容なので？

あなたのお父様が戻られるまでに終わらせねばなりません、早めに終わる内容が好ましいですね。」

俺は少々通常よりも高圧的に言い放った。

「簡単なことですね。」

我が執事たるものある程度の戦闘能力は必要ですね。

この私に1度でも触れることが出来たなら、認めて差し上げましょう。

私は能力でそれを妨害します。」

少女はそう言う。

戦闘能力、少女はその面でしか能力者を捉えていない。  
その事実が露呈する瞬間だった。

「ほう、あなたが雇う者はすべて戦闘能力に秀でている、と？  
と言うより、能力を戦闘面でしか見ておられないので？」

俺は冷笑を顔に貼り付けながらそう言った。

「ふ、ふん、私たちに仕える者としてある程度の危機管理は出来なく  
てはならないの。  
わかるでしょう？」

主と自分が行動を共にしていたときに悪漢に教われないという保障  
は無い訳ですし。」

ふん、また尤もらしいことを言っではいるが……。  
本心はストレスの捌け口を探している時に俺が来た、ってところか  
な？

まったく……、ツイてないね、ほんと。

「……ふう、いいでしょう。」

それで行きましょう、先ほども言いましたがあまり時間を掛けたく  
ない。

私があなたに触ればよろしいんですね？」

まあ、幸い俺の能力として『空渡り』ならこれは楽勝だな。

早めに終わらせないとあの男がやってきても面倒だ。

「ええ、その通りです。」

尤も、今までで触れられた人間は皆無ですが。

無論、あなたも能力者でしょうから、私も遠慮なくいかせて頂きま

すわよ。」

まったく・・・、どこまでも自信家なヤツだな。

・・・って、なに？

俺が能力者だと、知っていた？

いや、気づいただと？

・・・血はつながりを求めるもの、か。

さすが清とやらの娘だけある、ということだな。

ふん、やってやるうじやないか。

そうだな、このタバコ一本吸い終わるまでには決めてやるう。

「ところで貴方、何故ボールペンを啜えてらっしゃるのです？」

って、ボールペン！？

題名考えるのが面倒になった作者、よって以後気分ですげますの巻(前書き)

あゝ、題名の通り、なんかつながりを見つけれなくなってきたんでこれからは私の好きにつけさせてもらいます。^^; . . . よく考えたらこんなこと言わなくてもいい、のか？

題名考えるのが面倒になった作者、よって以後気分でつけますの巻

第4話

『題名考えるのが面倒になった作者、よって以後気分でつけます

(たぶんこの第4話はつけるとしたら『圧力と転移の関係』かな?)

』

ある株式会社のある社長室にてある1組の男女の様子・・・

「・・・・・・・・・・」

少女は何も言わない。

「・・・・・・・・・・」

俺も何も言わない。

否、言えない、というほうが正しい気がしないでもない。

かといって物理的な何かが存在するわけでもない。

ただ前話の『ボールペン』云々が引きずっているだけだ。

・・・尤も、少女、清の娘であろう少女はそうではなかったらしい。

俺が何も返答しなかったからだろうか、少女の持つ右手のナイフ、自らの髪、周囲に存在した書類などが重力から開放されたかのよう  
に虚空に漂っている。

「フツ、フフツ、なるほど、私をからかっているわけね……。  
一応忠告しておいたはずなんだけど。  
もう始めますよ。」

手加減しようかと考えてましたが……、気が変わりました、覚悟して受けなさい。」

正直作者自身もココまでポケを引きずるとは予想していなかったよ  
うだ。

まったく、作者がちゃんとしていれば俺が気まずくならず済んだ  
ものを……。

俺は心の中でそうばやいた。

尤も、それによって何かが変わるわけではないのだが。

「……すみません、今回はまったく考えての行動ではありません  
でした。」

謝罪します。」

「五月蠅いわ、問答無用よ。  
死になさい！」

もうすでに目的がすり替わっているのだが少女は気づいていないよ  
うだ。

尤も、今回は俺の全面的なミスであると言わざるをえない、俺にあ  
る選択肢は1つだけであるのも明白である。

「わかりました、始めましょう。」

そうして、あまりにも無理のある流れで、俺の少女に認めてもらっ  
た為のテストが始まるのだった。

……俺の命をかけた理不尽な戦いが。

「はっ！」

少女が右手をかざし、中空に停滞させていた数本のナイフを俺に向かって撃ち放つ。

それらは飛翔中に四散、四方八方から俺に向かってその凶刃を向ける。

「ふん」

俺は向かってくるナイフを少女のほうへと転移させる。

俺を狙った凶刃は一転、少女へと襲い掛かった。

「なっ!?!」

少女は一瞬驚愕の表情を見せ、すぐに表情を引き締めた。

そして自身の周りへと重力場を形成、その重力に負け、少女を狙う凶刃は失速し地面へと落下する。

「つく、危なかった……。

まさかそんな返し方をするなんて……。

あなたの能力は転移系か……。

ならこれでどう!?!」

少女は懐からさらにナイフを取り出すと周囲に停滞させる。

実に20本近くの凶刃が様々な方向から俺を襲う。まったく、これじゃ先ほどと何も変わってないじゃないか。俺の能力を推測したならそれに対抗しないと……。やはり『推測』に関しては清には遠く及ばないな。尤も、清はそれが能力によるものである以上、早々簡単に越えることは出来ないが。

だが流石にこれを反す（かえす）と全てに対処できるかどうか……。

……仕方がない、避けるか。

「ふん」

俺はため息を一つ吐き（つき）、能力を発動する  
俺は自らの能力としている『空渡り』、いわゆる空間転移によりその座標から脱出する。

「なっ!？」

自らを転移させるなんて……!？」

少女はかなり驚いたような反応を見せる。

さっきはすぐに表情を引き締めたのに……。珍しいこともあるんだな。

さて、そろそろ終わらせるか。

俺は少女の目の前へと自らを転移させた。

シュッ!

少女が俺に向かってナイフを打ち出す。

俺はさらに自らを転移させ少女の真後ろへ。

少女は背中に気配を感じたのか、咄嗟に自身の周囲へと重力場を形成した。

俺は瞬時に10メートル近く離れた位置へと転移、離脱する。

「くっ、ちょこまかとっ！

少しはとまりなさいよっ！」

少女は不満を爆発させる。

確かに、からかっているようなもんだからな、相手の前後を行ったり来たり。

「そんな無茶言わないで下さい。

俺の能力はあくまで転移、それ以上でもそれ以下でもない。

ならば自身の能力を最大限に利用するしかないだろう。

本来ならば貴様の後ろをとった時点でその首を刈ることも可能なんだがな、流石に俺もそれはしたくない。」

「あなた……、口調が素になってますよ……。

まったく……、それにしてもとても厄介な能力ね……。」

そしてポン、と少女の肩へと手を置いた。

最後のセリフは少女の後ろから言った、少女も自身の負けを理解していたのかすでに抵抗はしなかった。

尤も何故か手を置いた瞬間、体を震わせていたが。

まー、何にしてもこれで俺の勝ちだ、まー、今回ののは能力の相性が良すぎたな。

「ふ、触れた……。」

ん？

「わ、私に、触れた……。」

何だ？

どうも様子がおかしいぞ？

触れた？

お前が触れると言ったんじゃないか。

「い、いえ、私が触れると言ったのですからあなたが気にすることはありません……。」

で、ですが、まさか触れられるとは思っていませんでしたので……。」

少女は急に汐らしくなりそう言った。

まったく、変な感じだな……。」

さっきまで俺を殺そうとしたくせに。

「ところで、私はあなたに認められた、ということでしょうか？」

俺はこの騒動の発端であることを聞いた。

まあ、本来俺は清に呼ばれたんだから、このテストとやらを受ける必要はなかったんだがな。

「え、ええ、認めます……。」

予想外でした、まさか戦闘向きでない能力で私を圧倒するなんて……。」

「……あの、失礼ですが、何故急に口調が変わられたのです？  
先ほどまでもう少し、あー、そう、元気であられたのに。」

「あなたも同じですよ。」

とはいっても、あなたの場合すぐに元に戻ってしまいました。これは……、そう、あなたにはもう私の素を見られてしまいましたから隠す意味がないか、と。

やはり戦闘になると自分を抑えるのが難しいです。

私は 黒崎 玲（くろさき れい）

あなたも素で接していいですよ、私は認めた人間には態度などといったことを気になどしませんから。」

……普通は汐らしい態度が被った皮で少し我がままで高飛車な態度が素、つてのが一般的だと思うんだが。逆つてのはなかなかないよな……。

今まで多くの人間に会ってきたが俺も初めてだぜ、こんな人間と会うのは。

「そうですか、いや、そうか。」

ならば素で接するとしよう。

すこしお前に興味が湧いてきた、これからよろしく頼むよ。

はははっ、この場合俺が雇われるほうだからこの態度は注意を食らうかも知れんな。

というか、今更な気がするが、俺のモットーは『如何なる者にも紳士であれ』なんだが、どうやら例外も存在したらしい。

こういうのは苦手だったんだが、考えていたよりずっと心地いいな。

┌

俺はそう、少女、いや玲へと告げる。

「へっ、例外って私？」

なんだか変な感じ、例外ってあんまりいい言葉じゃないのに何故か

心地いい。

そうだ、なら私の執事になるってどう？

そうすればこの心地いい気分はずっと浸れるよね。」

そう玲は満面の笑み、という言葉がピッタリな顔でそう言った。

おいおい、なんだ、この変わり身の早さ……。

急に幼くなった、いや年相応になったってどこか。

うん、やっぱりどこが無理してるようにみえたもんな、このほうがいいや。

俺はどこか心地いい気分のまま、清が来るまで玲と談笑したのだった。

社長の帰還、ただし威厳はありません（前書き）

なんか今回長いです。

ちよつと無理やり印象を変えたんで違和感を感じるかもしれない  
がご愛嬌ってことで・・・。^^;

つてか誰か感想とか評価とかして〜

（\*^o^）又（^-^\*）

!!!!

読んでくれる人が本当にいるのかとても不安になる今日この頃。

¥（;。。）ノ

社長の帰還、ただし威厳はありません

第5話

『社長の帰還、ただし威厳はありません』

俺と玲が話しに花を咲かせてはや1時間

未だ清は現れず、前話に続き心地良い談笑を楽しんでいた。

その時

ジリリリリーンッ、ジリリリリーンッ！

到底社長室には相応しくない黒電話の音が部屋に響いた。

「あれ？

フロントから連絡みたい、一体どうしたのかな？」

玲はそうつぶやきながら受話器を取る。

俺は玲が電話を取る様子を見て、微笑ましく思いながら聞き耳を立てたのだった。

尤も、俺の能力にとって造作もないことである。

皆は知っているだろうか？

音というものは空気を伝わる振動であるということ。

そして俺の能力は空間の転移（当面は他の能力を出すつもりはない為）、音の伝わる空間そのものを自身の可聴範囲まで転移させるこ

とにより遠距離の音をも聞き取ることを可能にするのである。

ココからは我が能力で得た内容を玲視点でお楽しみいただこう。

（玲side）

ジリリリリーンッ、ジリリリリーンッ！

隆と話に花を咲かせる最中、突然フロントからの電話が鳴り出した。ふとベッドのそばの電話を見やる。

ちなみにこの電話、何故かお父様が気に入ったとかいって買ってきて以来ずっとこの黒電話を使っている。

正直私はこの黒電話の良さがわからず、この部屋からも浮いているためいつか取り替えてやる、と企んでいる。

尤も、何故か実行に移そうとするとお父様に感づかれてしまうのだが。

どうもお父様の能力が関係しているらしいのだけれど、未だにそれが何なのかわからずにいる。

隆ならばあるいはお父様の能力を知ることが出来るのだろうか。

「あれ？」

フロントから連絡みたい、一体どうしたのかな？」

そう呟きながら私は未だに鳴り続けている黒電話へと歩いていった。途中、隆が私を見て微笑んだと思うのだけど、その次の瞬間には目をつぶってしまったので真実はわからない。

というか、男の人と2人きりでココまで長くいたのは初めてだ。でも、まったく不快感は現れなかった。学校では2人きりでないにもかかわらず強烈な不快感を感じるのに・・・。

「はい、なにか？」

私は受話器をとりそう言った。

口調が固くなるのは初対面の人間、気に入らない人間と対するときだ。

どうしても皮を被ってしまう。

尤も、それをつけない素の自分を知っているのは家族を合わせても片手で数えることが出来る。

どうやら私は軽い対人恐怖症のようなものなのかもしれない。

尤も、恐怖では無く不快感しか湧いてこないが。

『はい、どうやら会議が終わったようです。

もうすぐそちらへ社長が行かれるようですのでとりあえずお知らせしておこうかと思ひまして。

そちらに社長の知人の方がいらっしゃるはずなんです、彼に会議の終了時間を聞かれましたので。』

「そう、ありがとう

私から伝えておくわ。」

『では、お願いいたします、玲様。

用件はそれだけです、では失礼いたします。』

用件を必要なだけ確実に素早く伝える。

私あまり人と話すのを好かないと知っての反応だ。

こういうときやはり私は社長令嬢なんだな、と実感する  
・・・尤も、そうするように教えたのは私なだけだ。

そんなことを考えながら私は隆の元へと戻って行くのだった。  
自身でも戻って行く、という表現に戸惑いながら・・・。

玲 side end

ふう、流石に人の話を盗み聞きするようであまり気分のいいものじ  
やないな・・・。

今後気をつけよう。

俺はそう思いながら、受話器を置き、こちらへと向かってくる玲へ  
と微笑みかけるのだった。

「どうも会議が終わったみたい。

すぐお父様が来るらしいから、準備・・・するものはないね。

くつろぎながら待つてましよう。」

俺の目の前のイスに座ってすぐ、玲は俺の目を見ながらそう言った。  
・・・さつきから気になってたんだが玲は驚くほどに純粹だ。

そのあまりの純粹さに思わず心配してしまうのは仕方が無いことだ  
ろっ。

どうも純粹故に、俺をテストした時のように気を悪くした相手には  
自らの感情をぶつけるみたいだし・・・。

「では、そうさせて頂きましょう。  
なんでしたら、紅茶でも入れさせて頂きますが？  
どういたしましょう、お嬢様？」

そう俺は口調を正しながら言った。

俺の中では軽いジョークのつもりだったのだが、玲の顔が影る。  
ん？

俺はいらないことをしたか？

ここは『そうね、ではアツサムを。』とかの反しを期待したんだが。

「どうした？

軽いジョークのつもりだったのだが。」

俺はあわてて口調を戻しそう言う。

途端、玲は嬉しそうな笑顔を浮かべ俺を見た。

むう……、なんか調子狂うなあ……。

「あの、お願いがあるの。」

私の前では敬語とかやめてほしい。

なんていうか、せっかくあなたといると心地良い気分になれるのに  
敬語でしゃべられると何か見捨てられた気分になってくるよ……。

「

玲は深刻な顔でそう言った。

どうやら、玲にとって敬語とは大きな意味を持つものらしい。

まあ、敬語でしゃべらなければいいだけで、俺としても敬語は苦手  
だから別に何の問題も無いんだけど。

「わかった、それぐらい問題ない。」

あ、でも2人でいる間でいいかな？  
流石に清の前で社長令嬢にタメ口じゃ、ちよつとね……。」

俺がそう言つと玲はまた悲しそうな顔をする。

どうも俺はこの顔が苦手らしい。

これを見ると俺の考えも曲げて、玲の意見に賛成したくなつてしま  
う。

どうも、俺自身玲に影響され始めているようだ。

だがこの影響は悪いものではない、何の根拠も無いのにそう思えた。

「ね、別にお父様は怒らないよ？

それに私、お父様も喜んでくれると思う。

私、今までほとんど人と話そうとしなかつたんだもの、しゃべり方  
なんて気にしないと思うけど。」

そう玲に畳み掛けられる。

……仕方が無い、か。

そう思える時点で俺の中に玲という存在が大きくなっていることに  
気づき驚いた。

この短時間に人の心を動かす、なんて不思議なことだろう。

俺は本気でそう思った。

「わかつたよ、だが玲と清の間だけだよ？

俺もあまり周りから批判を受けたくないし。

いろいろと問題が起こる可能性も否定できないからね。」

俺は最大限の譲歩をし、さらにこつ付け足した。

「その代わり清の前だけは俺も玲に敬語を使わないと約束するよ。」

「うん・・・、そうね、とりあえずそれでいいや。  
でも、隆が大丈夫だと判断した人の前ではちゃんと敬語なしで話  
してね？」

玲はそう妥協するかのように言った。  
事実、妥協したのだからが。

にしてもやっとひと段落着いたな。

「ところで、清はいつ来るんだろうな？  
思っていたより遅い。」

「そうね、お父様、なにやってるんだろう？」

そう俺たち2人が向かい合いながらそう言った。  
その時、

「ふう、もういいかね？」

俺たちの真横から清の声でそう聞こえた。

「「!?!?!?!?!?」「」

驚いて振り返ってみるとそこにはスーツ姿の清が。  
やはり男の俺から見ても整った顔してるよな。  
玲が生まれるのは決定事項だったわけだ。

おれはどこかそんなことを考えながら口をパクパクさせながら固ま  
っている玲を見た。

「玲、どうやら逆神君と仲良くなったみたいじゃないか。逆神君、ありがとう、玲は人と話すのが苦手なんだが、キミなら大丈夫なようだ。」

そこでキミの仕事なんだが、普段は玲の身の回りの世話、所謂執事をやってもらう。

それと同時に、私たちが急を有するときに運転手、この場合は能力者としての君の能力を生かしてもらおうと思う。」

俺としては願っても無いことだった。

玲といるのは楽しいし、運転手というのも能力を使えばすぐにすむことだ。

「そこでなんだが、キミの力は一体どれほどの消耗度なんだい？

所謂どの程度の距離を何回転移すると能力が使えなくなるのか、ということだが。」

清はそう言った。

ん？

能力に制限があるのか、この世界には。

いや、前の世界にもあるにはあったか・・・。

ただ俺の能力はそれが存在しないから忘れていたよ。

「基本的には特に制限はありません。

ただ、目に見える範囲の者もしくは物でない転移させることは出来ません。

まあ、カメラなどの映像によるリアルタイムの情報ならできなくは無いです。」

そういうと玲と清は驚いた顔で機能を停止していた。

おゝい、俺、何か変なこと言った？

「隆……、口調が元に戻ってる。」

それにしても隆、制限が無いなんてそんな馬鹿な話、あるの?」

あ……、わすれてた。

どうもまだ清は安心できないと俺の中の何かが告げているようだ。

「い、ごめん。」

まあ、正確には制限はあるんだろうけど。

今までそこまで酷使するようなこと、無かったからね。」

「なるほど、まだ私は逆神君に完全に認められたわけではないんだね。」

まあ、それが普通の反応だと思うよ。

今回の玲の反応はそう見ても異常さ。

さて、募る話は向こうへ行ってからにしよう。

とりあえず逆神君、この座標まで転移してくれるかい?」

「わかりました。」

そういった俺の横で玲が俺の持つ地図を覗き込んだ。

「これ屋敷の地図……、隆、屋敷に住むの?」

玲は若干期待をこめてそう言う。

「ああ、そのつもりだよ。」

何かと彼の能力は使い勝手がいいからね。

ではいこうか」

「そうかもしれないわね。」

まあ、私はむしろ一緒のほうが楽しそうだから何の問題も無いけど。」

「そういい、2人は俺の肩へと手を置いた。」

「では行きます。」

そういつて俺は能力を発現させた。

イベントといっくせにまったくイベントになってないイベント・前半（前書き）

眠い。

GvsGのエクシア、今日行ったゲーセンまだ解禁されてなかっ

たああ・・・。

やりたかったのに！

・・・この後不貞寝しますよ、ええ。

ヒントといっくせにまったくヒントになってないヒント・前半

## 第6話

『ヒントといっくせにまったくヒントになってないヒント・前半』

ブンツ・・・

例の音が虚空へと響く・・・。

その音の一瞬後、尤も人間の意識の中では同時刻といえる。

3人の姿は10キロ離れた屋敷の前に現れた。

「ふむ、やはり便利だな。

ココまで自由な転移系の能力を私は知らない・・・。」

そう清は言った。

尤も、それは至極当然のことである。

この世界において、何も転移系の能力者がいないわけではない。

だが、その誰もが多大な制限がかかっており、多用することなど出来なかったのである。

今まで転移系の能力者が仕事としてそれを利用していなかったのはそれによるところが大きいだろう。

使えるのは1キロ先まで、それも次使えるようになるまで1週間かかる、というのに誰が仕事に使うなどと考えるだろう。

ようは能力者の中で転移の能力は底辺に位置するということである。と、前の世界でコッチの世界を調べたときの情報である。

まあ、俺の能力はそれらを圧倒するものであるが。

「私もです。」

今までいろいろな能力者を見てきました。でも、能力の持続性という面では私以上の能力者を未だかつて見たことがなかった。

ほんと、隆って何者なの？」

そう玲が言う。

彼女が言うことも前述のように至極尤もである。

「それは俺にわかることじゃないな……。」

自身のことだが、あまりにも能力は不明な部分が多すぎる。」

転移系は特に絶対数が少ないからな……。」

え？

どこ情報かって？

そりゃ、前の世界の時に調べたのさ。

彼を知り己を知れば百戦殆からず、ってね。

まあ、戦って表現はちよつと変だけど。」

「たしかにソレは言えてるね。」

似通った能力はあるが、完全に同一のものは存在しない。

私の能力、玲の能力、隆君の能力、どれも能力と枠の中に存在するが各々まったく異なる事象を起こすのだからな。」

清が改めて実感するようにそう言った。

とはいっても、俺の場合、この世界の能力とはちよつと違うんだよな……。」

ん？

俺の能力？

秘密、にする予定だったんだけど、このまま進めていったらあまりにも知るのが遅くなりそうだし、今教えちゃおう。

あ、もちろん読者の皆様だけに。(笑)

もちろん少しだけ、能力は何か考えるのも楽しいもんね。

その片鱗だけ紹介しよう。

「あ!？」

その時玲が声を上げる。

何だよ、人がせっかくヒントをあげようと思ったのに。

……もちろん読者だけに。

「どうした?」

俺と清の言葉が重なる。

「あ、あれ見て!

あの家、燃えてるよ!!?」

玲が指差した先を見ると、確かに木造住宅(であろう建物)が勢い良く燃えていた。

その真紅の炎はとても自然界に存在し得るモノではない……。

……能力者、もしくはそれに順ずる何かの仕業、とみて間違いないな。

「な、何とかならない?

わ、私の重力の能力はこういったモノには役に立たないのよ!」

普段(といってもそういえるほど付き合いは長くないが)の軽さが排除され、代わりにひどく取り乱した玲がそう言う。



その基準!?

その時、ふと周囲の視線が自分に集まっていることに気がついた。違和感を感じ玲達を見ると、隆から数メートル離れた位置へ(隆との関係を知られない程度に)距離をとっていた。

そちらに目を向けるとあからさまに目を逸らされた。

がーん、ちょ、ちよつとシヨック・・・。

何が原因だ・・・?

とりあえず忠告させてもらつと、さっき声に出してたよ

「それを早く言え!!!」

おかげで俺が恥をさらしてしまったじゃないか・・・。

ん?

また視線が・・・。

またやった

もういい!

からかうんじゃない!

どっちにしても、せつかく作った状況なんだから、ちゃんと出してね。ヒ・ン・ト

き、キモイんじゃないボケー!!!

テメエ男だろうがああああ!!!!!!

隆の心の声はむなしく響いたのでした、と。

おしまいおしまい、めでたしめでたし。

つて、よくねーよっ!?

何勝手に終わらしてくれちゃってんの？

だいたいまだ、火消えてないし!?

ヒントも出せてないのに!?

そう吼える馬鹿がココに一人・・・。

後半え〜つづくっ!



ヒントといづくせにまったくヒントになってないヒント・後半(前書き)

ふう、書けるときに書いてしまおうと書き出したはいいが眠くて途中仮眠を挟んでしまった、神威です。。。。(。|。；Aアセアセとてもじゃないが起きてられなかった。。。^ ^ ; ;

ヒントといっくせにまったくヒントになってないヒント・後半

## 第7話

『ヒントといっくせにまったくヒントになってないヒント・後半』

場所はどこか、時間はいつか、天気はなにか

そんな中、目の前の燃え盛る炎を前に何かを叫ぶ、少し狂った青年、  
というには些か若く、少年、というには少し大人びた男が立っていました

当然彼の周りから人の姿が消えていきます。

まあ、狂っている人のそばにいたい人間なんてこの世に存在しません、至極当然であるといえるでしょう。

って、オイ、作者！

いきなり出てくるんじゃないっ！

だってこの小説、コメディとか言いながらコメディっぽくないんだもん。

作者の声はそう、哀しそうに言いました。

・・・嘘です、とてもニヤニヤ（顔は見えないので想像だが）しているようです。

そんなこと俺が知るかよっ!?

そうですか、では自由にしますから気にしないでください  
さて、先ほどの続きですが、どうも主人公には妄想癖があるよう  
です。

そんな主人公がモテるのはパソゲーだけです

だーかーらっ!

勝手にナレーション入れるんじゃない!

これは初の主人公視点の小説なの!!!

勝手に第三者が入ってきたらダメなんだ!

だいたい作者、さっきと性格変わってないか?

いえ、ただ仕事モードにはいっただけです。

というかさっきのはノリです、あのほうがいいかと思っただけです。  
断じてこんな喋り方の知り合いが押しかけてきたなんてことあり  
ません。

ええ、ありませんとも!

おい、そこ、力説するな、そう言うことにしといてやるから。

ところで、そろそろヒント出してくださいね

だから勝手に性格変わるな!

ってかかってにしゃべるな!

というか消えるおおおおっ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

はいはい、わかりましたよ

流石に周りの視線が可愛そうなものを見るものになってますからこ  
れぐらいにしときましよう

もう手遅れっ!?

オイ作者!

せめてこの誤解だけでも解いていけよっ!

はてさて、なんのことやら?

では、あでゆ

二度と来るなっ!

ってかどれだけ長いんだよ・・・、作者のお喋りめ・・・。

聞こえていますよ

どうなってもいいんですね、了解しました

さっさと消えるーーーーー!!!!!!!!!!!!

俺の心の声はむなしく俺の心へ響いたのだった・・・。

隆が1人妄想をしていたところ・・・

♪玲&amp;mp;清 side

「ねえ、どうしようか」

玲はそついいながら自らの能力である重力を操り、空気の出入りをふさいでいた。

とはいっても、空気単体にかかる重力などたかが知れている。

それを増幅したからといって完全に遮断するには至らないのが現状だ。

「流石に、私たちの能力では難しそうだ。

隆クンの転移でどこかの水を持ってきてもらうしかあるまい。」

そう父様は状況を冷静に判断し、言った。

「で、でも……、隆は今、なんか変な空気の中てられたのか正気じゃなさそう……。」

どうしようか……?」

「隆、そろそろ戻ってきて。」

早く何とかしないとシャレじゃ済まなくなっちゃうよ?」

そう、1人放心状態（作者の声に怒り、震えていたとも言つ）の隆に呼びかけた。

「ん、うん?

ああ、ごめん、なんか今すごく理不尽な人間に怒り、震えてたんだ……。」

って、作者わからないから言ってもダメか……。」

ん?

まだなんか少し隆の様子が変……。」

大丈夫かな?

玲& amp; 清side end

「降く、そろそろ戻ってきてく。  
早く何とかしないとシャレじゃ済まなくなっちゃうよ？」

俺をこの世に呼び戻した（大げさな）のは玲のそんな一言だった。

「ん、うん？」

ああ、ごめん、なんか今すっごく理不尽な人間に怒り、震えてたんだ……。

つて、作者を知らないから言ってもダメか……。」

まだ少し調子は戻らないな。

まあ、この程度の炎ならすぐ消せるさく。

「……大丈夫？」

おおうつ!？

何かきつい一言が……。

いえ、正気ですよ？

正気ですとも。

ただなんか作者が馬鹿なことを騒いでただけで……。

……あ、【作者の声は聞こえない】俺が独り言を「俺変人」つて  
すごい簡単な式が成り立つような気が……。

……キニシナイ。

つてかほとんど作者のせいなんだよね……。

……さて、そんな馬鹿なことなんかやってないでさつさと炎を  
消すとしますか。

あ、能力のヒントも同時にこなさないといけないんだっけ？

「じゃ、さつさと消すよ。」

そう俺は言つと左手を、正確には左手の人差し指を軽く天へと向ける。

想像するは水塊、この炎を包みこむほどの巨大な水塊。

また、想像するは箱、我らを包み、如何なる外力からも身を守る箱。

「はっ！」

その瞬間、炎にとりつかれ、轟々と燃えていた住宅の上部へと一斉に水がなだれ込む。

そしてその水は炎の全てを飲み込み、それだけにはとどまらず地上へも打ち込まれる。

「……うわあああつ！！」「……」

野次馬根性を見せ、見物に来ていた人ごと、水は全てを飲み込んでいった。

そう、ただ3人を除いて。

「……ねえ？」

なんで私達は大丈夫だったの？」

玲がポカンと口を開けたままそう口にする。

いや、そりゃ、濡れるの嫌だから、としか言いようが……。

「だって、濡れるの嫌じゃないか。」

こここの空間を他の空間へつなげたんだ、こうすればその場は見れる

が外力の影響は受けない。

まあ、転移の応用のようなものさ。」

そう俺は答える。

そう言った先で言うのもあれだが、嘘である。

水もこの空間も、『持ってきたのではない』のだ。

つまり、これがヒントだ。

がんばって我が能力のなぞを解き明かしたまえ。

・・・え？

誰に言ってるのかつて？

そりゃ〜、だれだろ？

「・・・これは、もう転移の能力外のような気もするがね。」

清はそう呆れ顔で言う。

「まあ、いいか。

では家に入ろうか。」

「・・・？」

なあ、転移してきたはずなのに何故家が見えないんだ？」

そう、そうなのだ。

俺はすっかりと指定された座標へと転移した。

だがそこには城壁のような壁、壁、壁！

どこまでいっても壁が続いている。

これは一体・・・？

「「何言ってる(の)んだい？」

この壁の向こうは全て、我が家(私たちの家)の敷地内さ。」

な、  
なんだってえええええつ  
———  
!!!!!!

ヒントというくせにまったくヒントになってないヒント・後半(後書き)

さてさて、やっと隆の住む家が見えてきました。

尤も、まだ一騒動あるわけですが。(笑)

なんかほんとにコメディだと思ってきてくれた人に申し訳ないです。

コメディ、考えていたよりも難しい……。

今回はちよつとコメディっぽくなった、かな？

なっていれば幸いです。ウ・・ウン(・|・:)

## ネタバレあり 初期設定資料（前書き）

え、コレ、著しくネタバレ要素があります^^；  
読まなくても別に問題ありません。

初期の設定はこうだったのか、とか思っていたただけなら嬉しいです。

ちなみに神威は、こういうものは飛ばす派です。^^；

## ネタバレあり 初期設定資料

コンセプト

『異能を持つ者が存在する世界』

世界観

現代とほぼ同じ。

異能が存在する以外は・・・。

主人公

逆神 隆 さかがみ りゆう

年齢：17歳

能力：空渡り（ 想力 ）

空渡り・・・空間転移能力、自身が把握した範囲の物質を任意の座標へ転移させる。

実際はこの『空渡り』の能力は『想力』の能力を利用しただけであるが、隆は『想力』を隠して生活している。

想力・・・自身の想像した事象を現実化する能力。能力者の中でも最強と称される。

職業：執事、その他

世界的にも有名な『黒崎財閥』に仕え、表向きは運転手。

しかしその実態は『空渡り』の能力による移動用の運び屋。

重役の護送を担当し、常時は『黒崎財閥』の一人娘、『黒崎 玲

』（くろさき れい）の運転手をしている。

ヒロイン？

黒崎 玲 くるさき れい

年齢：17歳

能力：引斥

自身に掛かる引力& amp; 斥力を操作する能力。

自身以外のモノにかかる力を操作することは出来ない。

『黒崎財閥』の一人娘。

彼女自身も能力者である。

黒崎 清 くるさき せい

年齢：37歳

能力：時の増幅

自身に流れる時間を自在に操作する能力。

自身に流れる時間を早めることによって高速思考を展開することが出来る。

『黒崎財閥』社長。

玲の父親。

坂井 修二 さかい しゅうじ

年齢：37歳

能力：無し

喫茶『鈴歌』のオーナー。

能力者ではないが、情報収集が趣味。

## ネタバレあり 初期設定資料(後書き)

最後までお読みくださった方(物好きさん)ありがとうございます。  
まあ、見ててあまり面白い要素はないですけど。。。^^;  
今後ともヨロシクです。ヨロシク)。ー。(ノ。\*ゞ:.:\*;. . .

仲間入りっ！壁の向こうの住人（前書き）

や、やっと、やっと私のよく行くゲーセンでもエクシア解禁されましたよ！

さっそく友人とエクシア×2でやったよ！

ん〜、格闘カッコいいな〜、射撃系は貧弱だけど・・・。^^;

さてさて、ついに隆が彼らの家に入りましたよ〜。

これからもヨロシク〜

あ、出来れば評価とかしてくれると嬉しいです。(´・`・´)ヨロシク

## 仲間入りっ！壁の向こうの住人

### 第10話

『仲間入りっ！壁の向こうの住人』

なんだってー、と俺が驚いてから1時間と少し。(正確には『な、なんだってえええええっーーーーー!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!』である)

流石に世話になる予定であるところが世界でも有数の大きさを誇る家だとは考えなかった。

いや、家が大きいただけではない。

というか家ではない。

これは既に城だ。

そう俺は思うことにした。

城(断固として家とは認めない)には様々な施設が併設されていた。何でも、『黒崎財閥』は清の爺さんのそのまた爺さんあたりが創設したらしく、かなりの古株であるらしい。

もっとも、俺にはさっぱりわからないことだらけだったが。

簡単に言うとおハヤテの人のお嬢様の城(あれも家とは認めない)を想像してもらえれば理解しやすいだろう。

「・・・つまり、ココは玲と清さんの家だ、ということ間違いないんだな？」

そう、俺は今、所謂応接室というところに通された。尤も応接室とは言いが、正直この部屋だけでも生きていけるような気がする……。

台所もあるし、冷蔵庫の中には各種高級& amp ;一級食材がズラリ。

冷暖房完備で、全自動で温度を調節する。

正直、俺の世界にもこれだけの設備がほしかった……。残念ながら見たことのあるものしか想像できないから、作り出せるはずも無い。

もし帰ることがあつたらこれを是非とも広めよう。

そう俺は決意した。

「ええ、そう。」

ここは『黒崎財閥』本部といつてもいいよ。

ただ、本部自体は別館のほうに設置してあるからココにいるのは私たち3人を含め10人もいないけど。」

「ああ、私生活まで仕事に追われるなんて嫌だからな。」

玲に続き清が補足した。

「気持ちわかる、だがこれだけの設備、実質7人程度で何とかなのかな?」

俺は尤もな意見を言う。

当然だ、流石に執事として雇われたのにハヤテの人みたく毎日掃除

が日課だなんて嫌過ぎる……。  
通称タマの『ネコ』と戦うほうがまだ許せるよ。

ふふふつ、あんまり著作権に触れそうな話はやめてね？

その時、またしても俺の心に話しかけてくる悪魔（作者と読む）の姿がっ！

……。いや、間違えました、声が！ですね、うん。

（また貴様か！？

俺の邪魔をしてくれるなっ！）

俺は心の中でそう言い放つ。

どうでもいいが心の中で言い放つ時のこの虚しさ……。一体なんなんだ？

それはズバリ、自身の馬鹿さ加減に飽き飽きした、ということですね。

と、悪魔。

だが悪魔よ……。いつまでもあの時の俺だと考えてたら痛い目見るぜ……。

そう心の中で呟くと、俺はまったく悪魔の話を無視し玲にこういった。

「なるほど、確かに気兼ね無い方がいいよな。

つて、そう言えば俺、あんた達に雇われた執事だったな……。

この態度、仕事中はやめたほうが？」

お〜い、無視ですか、無視するんですか、主人公君!?

.....

完全に悪魔はスルーである。

これでヤツはもう悪魔なんて物騒な存在ではなくなった。  
所謂、村人Aレベルの存在である。  
ふっ、この俺をおちよくりやがった報いだぜ。

・・・そうですか、私を無視するんですか。

なんか村人Aが騒いでるが無視無視、下手にかまうと面倒が起こる。  
そう考え、俺は玲(+清)に答えを促す。

「そういえば、隆くんは私が雇ったんだっただが気にせんでもいい、特にそれを気にするヤツなど、屋敷においておらん。」

もし直す必要があるときは事前に伝えるから安心したまえ。」

.....いいでしょう、あなたの人生、私がもてあそんであげます。

清が少し、雇い主としての威厳を漂わせながらそう言った。

正直、今までの態度によって威厳など感じる事が出来なかったが。

「そう、基本はこのままでいい。」

というかあなたのこと、執事として紹介しない.....。

あなたは私の護衛。

いつも私と行動する。」

玲が爆弾を投下してくれた。

ふっふっ、無視した罰ですよ。

私が作者だということを忘れないでほしいですね。

って悪魔、貴様の仕業かつ!?

一気にグレードが元通りだよ、まったく……。

「そう、いつ、如何なる時も共に在る。

いいね、騎士様みたいだ。」

ああ、神よ……。

何故あなたはそれも残酷なのですか……?

「……本気、か?」

俺は恐る恐る聞く。

「もちろん」「」

なんか途中悪魔の声まで混ざってなかったか?  
いや、気のせい気のせい、そうさ、気のせいだ  
……じゃなかったら遊ばれるの確実じゃないか。

「勘弁してくれ……」

ふっふっふっ、楽しみ〜

だからお前は消えろっ!

「さて、じゃ〜部屋へ案内するよ〜」

って、俺の反応は無視かつ!?

「無視だよ(だな)」「」

「もういいよっ!?!」

ってか、人の心を読まないでくれ……。」

……なんか、次々と作者の陰謀(と言う名の嫌がらせ)が浮き彫りに……。

気のせい気のせい、心優しい私がそんなこと考えてるはずないじゃない

……もういい、深くは考えないことにしよう。

そう俺は諦め、玲の後に付いていくのだった。

.....

隆と玲が出て行った応接室。

残された清といつの間にか表れた1人の女性（この場合アノ人しかないけど・・・^^;）

「どう思う、沙理？」

清がいつの間にか現れた女性へと言う。

「そうね、彼が玲にとって特別な存在だということはわかりましたけど。」

我が娘が、という気持ちがとても強いからか、なんかすごい違和感です。」

沙里と呼ばれた女性は少し苦笑しつつそう言った。

「確かに、誰に対しても一線を引いていた、いや、誰にでも突っかっていったあの娘が、という気持ちは強いな。」

「でも、きつといい変化、ですわよね？」

「ああ、そうあってほしいな。」

私たちとしては、娘の幸せを考える以上彼のようないレギュラーはどうかと思うべきなのかも知れんが・・・。

やはり、娘の笑顔と言うものには勝てんな、いいほうに転がるのを期待しようか。」

「ええ、きつと、きつと玲にとつても大切な出会いとなるでしょう。」

そう2人は微笑みながら言った。

その頃、隆が1つの大問題に直面しているとは、2人は思いもしなかった。

そう、隆にとつて、波乱の幕開けとなる、この大事件に（とつても大げさ）……。

初仕事は波乱の予感！？（前書き）

え、更新遅くなり申し訳ないです・・・。  
評価、感想を下さった にこさん、てけさん ありがとうございます  
す、そして更新遅れてすみません。(。ー。；Aアセアセ  
言い訳は長くなりそうなのであとがきでします・・・、当然飛ばし  
て頂いてもいいです。。。 (<^<)。。。。 ビエエーン

## 初仕事は波乱の予感!?

第11話『初仕事は波乱の予感!?!』

清と沙里が談笑していたその頃・・・

「な、何だつてっ!?!」

隆の叫び声が屋敷に響き渡った。

その発端である玲は、顔に微笑を浮かべながら椅子に腰掛けている。

「だ〜から、隆には明日から学校に通ってもらいます。」

そう、玲は今日の夕食を答えるかのような口調で言った。

「な、なんでだ・・・?」

俺は執事として雇われたんだろ?」

隆は未だ混乱から覚めぬ状態の頭で反論する。

もしこの時、隆がもう少し落ち着いていれば結果は変わっていたかもしれない。

・・・尤も、変わらなかったかもしれないが。

玲はそれに然したる問題を見つけられなかったのだらう、何の問題も無い、と言うかのように隆に顔を向ける。

「私の護衛をするのだから学校へも勿論付いてきてもらわないと。」

でも学校の内部では部外者は動きに制限が掛かるの。  
それなら生徒として学校に通ったほうが色々都合が良いじゃない？」

「だ、だが……。」

隆は反論を探し、既に逃げ道を絶たれているコトに気づき眉をしかめた。

護衛もするといった以上、玲のそばにいることは決定事項だった。

それは別に構わない、俺も玲とは楽しくやっていけると感じていたのだから。

「それに、どうせ一緒にいることになるんだから、楽しいほうがいいじゃない？」

そして玲の言っていることが最善であるということを経自身も感じていた。

「……わかったよ、俺も一緒に通えばいいんだな？  
でも、この時期に入学なんて出来るのか？」

結局隆が折れるという形で収まった。

まあ、こうなることは予想に難しくなかったが。

「その辺はほら、ちょこつと裏工作を？」

お父様の力で？」

学校に圧力を？」

そう言っつて玲は徐にケータイを取り出す。

「あ、お父様？」

隆の今後ですけど、とりあえず私の護衛として使わせてもらいますね？

それで、隆を学校に入学させたいんですけど、お任せしてもよろしいでしょうか？」

そうお父様こと、黒崎 清 に伝える。

思い立ったら即行動、素晴らしいほどの行動力である。

「ちよ、ちよつと待て!？」

なんだ、いわゆる裏口入学ってことっ!？

そ、それは流石にやばいんじゃない?」

隆の言うことも尤もである。

・・・ただし、あくまで一般人の場合は、であるが。

「何を言ってるの？」

そんな人聞きの悪い・・・。

私達はあくまでちよつとした可能性の話を学校側にするだけだから。

そう、もし私たちの援助がなくなれば・・・、って可能性の話、ね。」

黒崎財閥などの世界レベルの企業から圧力が掛かれば当然学校はつぶれる。

だから基本的に裏口入学程度ならば無理が通るのだ、と言っているように隆には思えた。

間違っではないだろうか。

「はぁ・・・、もうわかったよ。」

にしても明日からなんて急な話だな・・・。

なら、早めに用意しなくちゃな。  
で、俺の部屋はどこなんだ?」

と、話に一段落つけ、そう2つ目の問題を口にする。

「ん?」

ああ、部屋ね、ココなんてどう?」

そういつて玲は下を指さす。

「・・・ん?」

どういうことだ?」

意味がわからず俺はポカンと開いた口を閉めることが出来なかった。  
な、なんか嫌な予感が・・・。

「だから、ここ。」

私の部屋です

幸いベッドも2つあるし?」

そういいながら玲はニヤニヤと隆の反応を楽しんでいる、そう俺は  
心の中で突っ込んだ。

口に出さなかったのは下手に突っついてこの事項を決定事項にされ  
ないように、である。

幸い今の玲は冗談のつもりで言っているように見える、下手に突っ  
つくのは得策ではなかった。

「はあ!？」

そ、そんなことできるわけないだろう!？」

玲、自分の言っている意味を理解しているのか!？」

隆はおもいつきり反論した、反論したのだが……。

「勿論よ。」

隆と一緒に生活、楽しくなりそうじゃない？」

玲に一蹴される。

勿論端から見れば玲の言っていることは屁理屈もいいところである。だが何故か玲に言われると反論しづらいのだ。

それが何なのか、俺は既に気づいている、玲のあの笑顔である。

あの笑顔で言われると、どうしてもそれを崩したくないと感じてしまふのだ。

だからと言ってこれだけは譲るわけには行かなかったが。

「だ、ダメだダメだ！」

流星に同部屋に住めるほど肝は据わってない！？

って、そうじゃなくて……!?

だ、だから悪いが俺の部屋を別に作ってくれ！」

そう必死に俺は玲を説得する。

どんな手を使っても、同じ部屋で生活するなんて、とても精神がもつはずが無い。

能力を使うより10倍以上疲れるのではないだろうか。

「ふふっ、仕方ないか。」

流星にソレは難しいんだろうね。

わかった、この廊下の部屋は全部空いてたはずだからどこ使ってもいいよ。」

玲は予め考えていたかのようにそう言った。

・・・やられた、俺はからかわれたのか。  
な、何かとても幸先悪いスタートだな・・・、まあ、がんばろう。

「そうか、ありがとな

俺は学校の用意をしてくるよ

何かあったら夕食の時にでも」

そう言っただけ俺は玲の部屋を去るのだった・・・。

・  
・  
・

さて、どこにしようか。

玲はああ言っていたが俺が勝手に決めてしまっただけとは思えない。

やはりココは清に聞くべきだな。

だが、それには一つ問題があった。

「しまった、応接室の位置がわからない・・・。」

つまりはそう言うことである。

玲の後を付いて来たからか、道筋がさっぱりわからない。

こうだった屋敷にはよくいるお世話係りに聞こうにも人が通らない。

。そう言えばこの屋敷にいるのはほとんど玲たちだけなんだっけ・・・。

「・・・仕方ない、能力をつかつかうか。」

そう俺は思い立って、能力を発動させる。  
俺の周囲に不可視の力が湧き上がるのが俺には感じ取れた。

ブンッ・・・

そう、独特な音を残して隆はその場から姿を消すのだった。

・  
・  
・

ブンッ・・・

次にその音が聞こえたのは当然のことながらさつき清たちと話していた応接室である。

だが予想に反してそこに清の姿は無かった。

「いらっしやい、どうかしましたか？」

そう、そこには清が沙里と呼んだ女性の姿しかなかったのである。

「いえ、ただ私はどの部屋を使わせてもらえばいいのか、と聞きにきただけです。

玲さんに聞くとどの部屋を使っても良いとのことでしたが、やはり決めて頂いたほうが何かと都合が良いかと。」

そう俺は沙里と呼ばれていた女性に話しかける。

玲の母親だということだったが正直姉妹にしか見えなかった。

「あらあら、あの娘ったらそんなことをいったのね。よっぽどあなたのことを信頼しているみたいね、あの娘がココまで心を許したのを初めてみるわ。部屋は本当にどこを使ってもらっても構わないわよ？ なんなら、玲の部屋にする？」

・・・やはり玲の母親で間違いなさそうだ。沙里はそう笑いながら言った。当然のことながら俺はまったく笑えなかった。

「・・・既に玲さんに言われましたよ。丁重にお断りしましたが。」

あの方は少し自身のことを過小評価しすぎではないでしょうか？

そう、つい口が滑った、と言うわけではないが沙里に言う。だがそれを聞いた沙里は目を見開き、驚きに満ちた顔をしていた。

「まさかあの娘がそんなことをいうなんて・・・。」

どうやら玲は今まであんな態度をとったことがなかったようだ。特に他人に対してココまで信頼を表すのは初めてのことにらしい。

「玲のこと、よろしくお願いしますね。」

そういった沙里の声は、『信頼してるわよ、隆くん』とっているように俺には思えた。

「ええ、私はあの方たちに拾われた身です。私に出来ることならばなんでも。」

それを感じ、俺は恭しくそう答えた。  
そして気恥ずかしさからそそくさと能力を使いこの場から立ち去る  
のだった……。

初仕事は波乱の予感！？（後書き）

えと、言ってた言い訳です、ええ、言い訳ですとも。（開き直つた）

実はですね、学校が始まったんです。

それ自体は何の問題もないんです。

ただ、私のクラスは自主学习と言う名目の元に強制的に夜9時まで残らされるんです・・・。

学校から家まで1時間半かかるんで、帰ったら10時半・・・。

執筆する余裕と気力がありませんでした・・・。

今後も続くので多少更新が遅くなるかもしれませんが、更新できるようにがんばりますので今後とも皆さんよろしくお願いいたします。

よ（＾）＾（ろ）＾（し）（＾ー）（く）＾（ペこm）

—（m

## 学校へ逝こう!?!・準備編!?(前書き)

え〜と、今回何故か戦闘パートが8割以上を占めています・・・。  
戦闘シーンを書くのが難しく、文章が長ったらしくなってしまった  
コトが主な原因だともいいます・・・。 ; ; ;  
ただ、コレを2話に分けるのもどうかと思い、1話投稿とさせて頂  
きました。

あ、感想& a m p ; 評価お待ちしております。

特に、『ココはどうしたほうがいい!』とか『コレはイマイチ』だ  
とかどんどん送って頂ければ嬉しいです。(・)(^^)(^^)。

^(\*)^^o^(^o^)

## 学校へ逝こう!?!・準備編!?!

第12話『学校へ逝こう!?!・準備編!?!』

バキッ!

それは俺が転移した先で聴いた最初の音だった。

あたりを見渡すと、複数の男達が睨み合っていた。

高校生ぐらいの年だろうか。

一見、すぐにでも喧嘩が始まりそうな雰囲気である。

何故こんなところに俺はいるんだ・・・?

そう俺は心の中で呟く、だがその疑問の答えは既に俺の中では出ていた。

というのも、俺は気恥ずかしさから逃げるように転移した為、うっかり座標把握を怠ったのだった。

まったく、今日は色々なことに巻き込まれる日だなあ・・・。

・・・尤も、今回のこれは完全に俺のミスなんだが。

つまり転移先を明確に設定しないまま転移してしまったのである。

そして俺は現状を把握する為に詳しく周りを見渡した。

「ん?」

よく見てみると、複数の男達が睨み合っている、というには語弊があるようだ。

1人の少年に複数の不良たちがからんできている、という表現が一番この状況に当てはまるように思えた。その数、え〜と……、6人か。

「おい、その執事服」

そこでようやくあれの存在に気づいたのか少年にからんでいた不良の1人が俺にからんできた。はぁ……、これは変なことに巻き込まれそうだな……。まったく、俺ってツいてないぜ。

そう、心の中で愚痴りながら不良A（仮）に向き直る。不良A以外のB、C、D、E、Fはまだこちらに気づいた様子はない。

どうやら不良Aは見張り番だったようである。

「何か用ですか？」

俺は無表情で答える。

「あぁん？お前、何でこんなところに居やがる？見せもんじゃねえぞ、この野郎っ！」

突っかかってくる不良A。

この年頃の人間はどうしてこうも血気盛んなんだろうね？……あ、俺も一応こいつらと同じ年頃だっけ。

「五月蠅いですね、少し黙っててくれますか？」

そう俺は不良Aの話を中心に切り捨てた。

「ふざけてんじゃないやねえぞ、この野郎っ!？」

そういうと不良Aはいきなり俺に向かって殴りかかってきた。しかし体重の乗っていない、腕だけの拳など俺に通用するはずが無い。

俺はあえて避けず、左手で受け止めた、そして能力を発動する。

キーンッ

そう一瞬音が響いたかと思うと、先ほどまでいた不良Aは遙か彼方へと飛ばされていった。

・・・というわけではなく、不良集団の真上約5メートルに姿を現す。

「な、何だっ!？」

う、うわあああああっ!?!?!?!？」

真上へ転移させられた不良Aは何が起こったか分からない様子で集団の中へと戻っていった。

もつとも、顔面着地により気絶しているようだったが。

不良集団はもとより少年も驚き、固まってしまっている。

その間に、服に付いたほこりを払い落とす。

「テメエ、何しやがる!？」

「おい、大丈夫か!？」

「・・・気絶してるぜ、こいつ。」

ようやく硬直が解けたのか、不良たちは一斉に俺に向かって騒ぎ始める。

そして、先ほどと同じような声が掛かる。

今のでやっところちらに気づいたのだらう、不良集団がこちらに向かつて何か叫んでいる。

「五月蠅かったもので、強制的に排除させて頂きました。」

そう俺は淡々と答える。

「このっ！」

「喰らえっ、この野郎っ！」

「・・・死ね」

なにやら1人だけ台詞がおかしい様な気もしなくはないが不良B、C、Dが殴りかかってきた。

ん？

あと2人はどこいった？

そう思い、からまれていた少年のほうに目をやると、不良E&am p・Fと少年が殴り合いを展開していた。

どうやら少年は、俺がからまれている間に2人やるつもりでいるらしい。

当初の印象はあまり武道が出来るようには見えなかったが、思いのほか動きに鍛錬の跡がみられた。

おそらくは護身術の一種だらう。

だが護身術では同時に2人相手はキツイだらう。

「死ねっ！」

考え事をしてしていると、右から拳が飛んでくる。

俺はそれを体を反らすことで避け、体制の崩れた鳩尾へと後ろ回し

蹴りを打ち込む。

「ぎゃふっ!?!」

少々間抜けな呻き声を上げながら吹っ飛んでいく不良B。

急所へ強烈な一撃を喰らった不良Bは壁にぶつかり動かなくなった。そして後ろ蹴りによって体制の崩れた俺に不良Cが好機とばかりにローキックを繰り返す。

「このクソがつ!」

だが俺はそれが届くよりも速く、後ろ蹴りの体制からその反動を利用して左ハイキックへと移行させる。

反動を利用したハイキックは威力を増し、不良Cの右側頭部へと吸い込まれるかのように叩き込まれる。

「ぎゃっ!?!」

悲鳴を上げ終わることも出来ず、不良Cは意識を手放した。

「な、なんなんだ、お前はっ!?!」

不良B、Cが一瞬でやられたのを見て、不良Dは戦意を消失したようだ。

先ほどまでの態度のデカさが嘘のようである。

尤も、ココまでからんできていまさら無かったことになどする気は無いが。

「ふん、自分がからんできたんでしょ。」

自身の行動ぐらいは責任を持ったほうが良いですよ。」

そう俺は言い、瞬時に不良Dの右側へと走りこむ。彼には急に俺が現れたように見えたことだろう。不良Dは反射的に右手でパンチを繰り出してきた。俺はその腕の軌道を途中で逸らし、関節を極める。そしてその逸らした力を利用し、相手を投げる、勿論関節は極めたままである。それらが出す結論、それは

ボキッ！

「ぎ、ぎゃあああっ!？」

不良Dは極められていた右腕を押さえながら悶え苦しむ。つまりはそう言うことである。

関節を極めて投げたのだ、勿論その力が全てその関節へいくようにしてある、折れないはずが無かった。

「だから、五月蠅いといっているでしょう。」

そう言いつつ不良Dの後頭部へと手刀を落とす。

「ぐふっ!？」

その呻き声を最後に、不良Dは動かなくなった。ふっ、どうやら終わったみたいだな、ホント、だるかったぜ。

「ふう、終わったぜ」

不意に、すぐ傍でそう誰かが言ったような気がした。

・・・そう言えばまだ2人残ってたんだっただな。

そう、俺は若干嫌気がさしたのを悟られないように其方を向く。  
だが、そこにいたのは予想していた不良 E、Dではなく、例のから  
まれていた少年が立っていた。

「た、助かったよ、ありがとう、礼を言う。」

それと、悪かったなアンタを巻き込んで……。」

少年は俺に向かってそう言う。

「ん？」

いや、気にすることは無いよ。

私はただ五月蠅い害獣を駆除しただけのことですから。」

そう俺は動揺を気づかれないように無表情を作りながらそう言った。

「それにしても強いな、アンタ。」

少年は先ほどの戦いを見ていたのだろうか、嬉々とした目で俺を見る。

「いえ、それほどでも。」

「ははは、まあそりゃ謙遜するか。」

まあいいや、俺の名前は 酒々井 銀 (しすい ぎん)  
アンタ、名前は？」

……また変なのに出会っちゃったな。  
まあ、だからこそこの世界は楽しいのかも知れんが。

「私は 逆神 隆」

機会があればまた会うこともあるでしょう。  
では私はこれで。」

キーンッ

そう俺は言い残し黒崎邸へと転移するのだった。

その時、銀はというと。

「まさか・・・、能力者だったのか。  
能力を使わずにあれだけの戦闘力を有する、しかも転移系の能力者・  
。。。」

ま、別に関係ないか、俺は楽しければそれでいいからな。」

そう、独り言を呟いていたのだった。

・ ・ ・ ・ ・

屋敷に戻ってきた隆はと言つと

「遅いー!」

「いや、だから、能力の制御ミスで知らないところに飛ばされてたんだって!」

「うう……、せっかく、せっかく用意を手伝ってあげようと思っただのに……。」

「い、いや、だからそれは……、悪かった!

ごめん、今度から気をつけるよ。」

「絶対だからね!」

玲のお叱り（泣き脅しとも言つ）を受けてましたとさ。

その後、よく考えれば学校に行くのに用意なんてほとんど必要ないことを知った隆だった。

まあ普通に考えれば、まだ教科書類を貰ってない状態である。

持っていく物なんて、筆記具とクリアファイルぐらいしかないことは当然なんだけど。

学校へ逝こう!?!・準備編!?!(後書き)

作者：今回のあとがきは特になし!

隆：おいおい、無いのかよ、何か考えるよ・・・。

玲：そっだよ、どうしても思いつかなかったら作者を血祭りにあげよう

隆：おっ、いいアイデアだなそれ

作者：や、やめてー!!!

し、仕方ないじゃないですか!?

私だって忙しいんですよ!

本編書くだけでどれだけ時間を割くのに苦労したことか・・・。

隆&amp;玲：玲：それ、俺たち(私たち)に関係ないだろ(よ)

作者：・・・うわーん!。(\*/＼\*)

。ウワァーン!!。。。。。。タツツタツタツタツタ  
タタタタタ!(。。。)ノノ

隆：あ、逃げやがった。

玲：ほんとだ、逃げちゃったね。

隆&amp;玲：玲：つてことで今回のあとがきは終了です  
今後とも私たちをよろしく



## 学校へ逝こう!？起床の巻(前書き)

ごめんなさい!

すっごい更新停滞してました・・・。;;;

1日のほとんどを学校ですごしていたもので・・・。  
執筆の時間が取れませんでした。

・・・ええ、言い訳です、ホントごめんなさい。  
でわでわ、13話です。

残念ながらまだ隆たちは学校に行けません。^^;

## 学校へ逝こう!？起床の巻

### 第13話『学校へ逝こう!？起床の巻』

昨夜、皆が寝静まった頃。

・  
・  
・

コツツ・・・、コツツ・・・、コツツ・・・

廊下の一角に不気味な足音が響く。

深夜の不気味さも相まって、驚くほどその静けさがその音を強調していた・・・。

「そ〜っと、そ〜っと・・・。」

その足音の主はそう呟き、自身の出てきた部屋の真正面にある部屋のドアへと手を伸ばす。

「フフフツ、明日の隆が楽しみ」

その声の主はわずかに口元を綻ばせながら、そういった。

・  
・

翌朝、隆の部屋にて。

結局俺は玲の真横にある部屋を使うことにした。  
なぜかだつて？

ここ、玲が選んでいるだけあつて便利なんだ。  
何が便利なんだ？

そう思う人もいるだろう。

右の廊下を行けば食事所に出、左の廊下を行けば様々な（例を挙げ  
るのなら風呂場や遊戯施設など）施設がある。

そして正面の廊下を行くと玄関へと続く階段がある。

つまりこの場所（正確には玲の部屋）を支点に全ての場へといける  
のだ。

Z Z Z Z Z Z Z . . . . .

あ、ちなみに今はA M 7 : 0 0 の1分前だ。  
当然俺は寝ている。

正直に言つと朝は苦手である。

．．．尤も、得意な学生など聞いたことがないが。

ジリリリリッ！

そのとき歯車は動き始めた．．．。

．．．などというほどたいそうなものではない。

学生にとっての敵、枕もとの悪魔が騒ぎ始めたのだった。

その悪魔は嫌がる学生を無理やり起こし、起きなければ延々鳴り続けるという……。

「む、むう……。」

俺は半覚醒のまま枕元に手を伸ばす。

それは唯一この悪魔から逃れる方法を実践するためである。

まずはその悪魔の位置を把握する。

そして親の敵をとるかのような凄まじい一撃をその悪魔へと振り下ろすのである。

そうすれば一時的にはあるが、安穩がもたらされるのである。

……そう、少なくとも今まではそうだった。

そう、今までは……。

いつもどおり隆が手を伸ばす。

だが何か別のものが腕に引っかかっているのか、真横より上に、腕を上げることができなかった。

ぽよんっ！

そして、掴んだものを撫でながら、形を確かめる。

そして違和感を覚えるのだった。

そしてゆっくりとそちらのほうへと顔を向けた。

「!?!?!?!?!?」

そうして見たものは、俺の人生の中で1、2を争う状況の異常さだった。

ソレは俺の手に程よい力の抵抗を与えた。



よく見ると玲は俺の体にほとんど密着するようにして眠っていた。玲の端正な顔が目の前にくる状態である。

(うっわ、すごい綺麗な顔してるな、玲って。)

自分も極端に端正であることに隆は気づいていない。

今の玲はいささか見てはいけない状態になっている、と隆はこのとき気づく。

だが見てしまった後では気づいても意味がないと知る。

パジャマのボタンが上から3つ目まで外れ、玲の陶器のように透き通った白く美しい肩があらわになっている。

胸元は大きく開き、玲の持つ色気を大いに引き立たせていた。

一見しただけでは、とても高校2年生には見えない姿だ。

そしてそんな玲が虚ろな目で俺を見上げる。

位置の関係上、どうしても上目遣いになる。

その目とあったとき、体中の体温が一気に上昇、そんな気がした。

ドクンッ！

そんな玲の姿に、俺は一瞬見とれてしまう。

俺はそのとき自分の鼓動の音が大きくなったことを自覚する。

そして一瞬浮かんだ邪な考えを即座に否定するのだった。

「おい、玲、朝だぞ。」

そう、俺は玲のほうを極力見ないようにして言った。

「ううん、後5分・・・。」

「おいおい……。」

定番といえば定番な返答に少しあきれ俺。

この返答だけ見れば年相応な高校生である。

まあ、普通の高校生は人の部屋に無断で乱入などしないだろうが。

そして人のベッドに勝手にもぐりこむなんてことするはずもない。

……なんか、もしかして玲って超純粹培養？

いや、変なところで無垢なんだな、扱いに困るよ、その性格って。

そうばやきながらも、まったくいやだと思っていないことにいささか戸惑いを覚える俺だった。

「ダメだ、なぜ玲が俺の部屋にいるのかもまだ聞いていない。

さっさと起きろ！」

「んー、ヤダー！」

若干幼児化する玲を尻目に俺は着替えようとベッドから降りる。

いや、正確にはベットから降りようとした。

「わわっ!?!」

俺が降りようとしたその時、玲がバランスを崩し俺のほうへと倒れてくる。

どうやってたらベッドに寝転がっている状態でバランスを崩すんだよ

!?!

……って、そういえば俺の腕を抱いたままだったんだっけ。

俺のせい、なのか……?

咄嗟に玲を抱きとめ、床へと倒れる前にキャッチする。

だが慣性の法則に逆らうことなどできるはずもなく、玲を抱きとめ

たまま、俺は床へと背中から落ちるのだった。

「ぐふっ！」

俺はその衝撃から息が詰まり、くぐもった息が漏れる。

「んっ、びっくりした〜。

あ、おはよー、隆。」

そんな中、一人俺に抱きとめられている状態の玲がそういった。

完全に覚醒しきっていないのか、自分の置かれている状況をイマイチ理解していないようだ。

端からすごい構図だな・・・。

そう俺は思いながらも、意識は玲の胸元に集中する。

バランスを崩したことにより、もともとかなりきわどかった格好がさらに深刻なものへと変わっていた。

ボタンこそ外れてはいないが、そのパジャマはほとんど衣服としての役割を果たしていない。

肩口が大きくはだけ、胸元は今まで以上に露出している。

そして太ももまで露になっていた短パンもまた、その機能のほとんどを失っていた。

ホックが外れ、腰でとまっているはずの短パンは膝上までずれ下がっている。

そんな玲が俺の身体に抱きつくような構図で固まっている。

どうやら、今の状況をやっと理解し始めたようである。

なんか今、黒い布地のモノが見えたような気がする。  
……いや！あれは幻覚！  
そう、幻覚なんだ！

俺はそう、自身を納得させることにした。  
直視して理性を保てる自信はない。  
そんな俺を尻目に、玲は俺に向かって細い声でこういった。

「隆、そんな……、私たちが会ってまだ2日目だよ……？」

そう、壮大な勘違いを、である。

「なっ!？」

俺は固まった。

ええ、そりゃもう固まったね。  
まさかそんな淑やかな声でそんなことを言われるとは思ってなかった。

もちろん、俺がミスをしたわけではない。  
だが、なぜか恥ずかしさが頭のほぼ全域に広がっていくのが、俺には感じられた。

そう、そのせいで気づけなかった。  
普段は絶対に気づくであろう足音に。

コンコンッ！

朝の静かな空間にドアをノックする音が響き渡る。

俺と玲はどうすることもできず、ただただフローリングの床で玲を

抱きとめた格好のまま硬直するのだった。

無常にもそのままドアはゆっくりと開いていく。

「隆様、朝、です……よ……。」

そしてその世話係はその状況を見て固まり、俺たちが未だ固まっている間に復帰すると、

「し、失礼しましたー！？」

そう叫びながらどこかへと走り去ってしまったのだった。

……これは、大変なことになったな。

そう俺は心の中で呟くのだった。

その後、誤解を解く暇も与えられずその話が屋敷中に広まってしまった隆は、その誤解を解くために奔走するのだった。

その、隆が誤解を解くために奔走しているとき、玲は不機嫌そうな顔をしていたと、目撃者は語る。

学校へ逝こう！？起床の巻（後書き）

これからもよろしくデス

できれば感想、評価よろしくおねがいます。

学校へ逝こう！？登校までのお話（前書き）

久しぶりの投稿です。

なんだか話が一向に進みません。^^;

書き出すと次から次へと書きたいことが出てきてしまっ。...

今後がんばりますので、これからもよろしく願います。^^

ノ

## 学校へ逝こう!？登校までのお話

### 第14話『学校へ逝こう!？登校までのお話』

朝の事件から約1時間後、屋敷の食堂にて……。

なんとか誤解を解いた俺は遅めの朝食をとっていた。

なんとか登校までに誤解を解くことに成功した、その要因は、ひとえに屋敷の人の少なさだといっているだろうか。

屋敷にいる人の絶対数が少ないので何とか朝のうちにすませられたのである。

もしこれが一般の金持ちの屋敷だったらと思うとゾツとする。

使用人たちの誤解を解くだけでもどれだけ時間がかかるか……。

「ははは、流石にその話を聞いたときは驚いたぞ」

清が笑いながらさういう。

正直笑い話では済まない気がするが。

「ええ、本当ですよね。」

あの玲がまさかそんなことするなんて……。」

沙理さんもさう言っつて優しげな目で玲を見つめる。

そしてその流れで俺の顔も覗き込む。

「えへへ、だってね、楽しそうだったんだもん。」

玲は悪びれるでもなくそういった。

なんというか、さすが天然&超純粹培養のお嬢様って感じの返答に俺は脱力するのを禁じえなかった。

「あらあら、本当、今までの娘の反応とは思えないわね。」

沙理さんは苦笑気味にそう呟く。

清をみると、どうやら清もそう思っていたらしい。しきりに頷いているのが見て取れた。

「本当、びつくりしましたよ……。」

朝起きると横で玲が寝てるんだから……。」

俺は朝っぱらから疲労困憊な様子でそう言う。

「ふふふつ、そんなこと言って、役得もあつたんじゃないの?」

沙理さんが邪悪な笑みを俺に向けながらそう言った。

「ぶつ!?!?」

俺は唐突な沙理さんの一言に、危うく噴出しそうになる。

ギリギリのところでなんとかとどまった。

「なつ!?!?何を言ってるんですか!?!?」

俺は混乱が冷め切らないまま、そう問いただす。

「ふっふっふ、そんな力いっぱい言うところが逆に怪しいわね。」

「沙理がいいおもちゃを見つけた、というように俺にちょっかいをかける。」

俺はその執拗な追及から何とか逃れながら、逃げるように食堂を後にするのだった。

・ ・ ・ ・ ・

隆が黒崎夫婦にからかわれた、食堂事件（隆命名）からしばらく後。

「ふう、ホント、冗談でもああいうことは言わないでほしいよな。俺としては少し事実だけに返答にこまるったらありゃしない。」

当然俺だって男である、玲ほどの美少女がそばで寝ていてなんとも思わないなんて無理な話だ。

おそらく黒崎夫婦もわかっている、わかっている上でああいった冗談を言うのだろう。

一番厄介なタイプである。

「さて、そろそろ登校時間だな。」

さすがに初日から遅れるのだけは避けないと。」

そう言っつて俺は、玲の部屋へと赴くのだった。

（玲 side）

コンコンッ

ん？

誰かがドアをノックしてる？

誰だろ、この時間に誰か来ることなんて今までなかったのに。そう私は思いながらドアに向かって叫ぶ。

「はーい、今開けます！」

そして私はドアのほうへとパタパタと速足で向かっていく。

カチャリ

ドアの鍵を開け、うち開きのドアを開く。

「おう、そろそろ学校に行くか。時間的にもころあいかと思っただが。」

ドアを開いたそこには、昨日知合った隆が立っていた。

服装はいつも着ている（といっても昨日一日だけだったが）執事服とは違い、高校の制服を身に纏っている。

いつも見慣れているはずのその服装は、しかし隆が着るとどこか違

った雰囲気醸し出していた。

細い線の中に確固たる意思を感じさせるものを持つ、天性の美貌とでも言うのだろうか。

隆は、そんな雰囲気とともにドアの前に立っていた。

「お〜い？」

大丈夫か〜？」

隆が私の目の前で手を振る。

だが私は隆の美麗さに見惚れ、それどころではなかった。

そうして、結果的に隆のことを無視する形となってしまうていた。

「む、無視することないだろう。」

すると、隆は何を思ったか、私の髪を撫で始めた。

髪を指で梳いてみたり、優しく輪郭に沿って撫でてみたり、と。

「・・・はっ!？」

フリーズしていた私はその隆の反応に瞬時に後ろへと飛びのいた。もしこれがアニメなどだったら、『ズザッ!』という効果音が流れたことだろう。

「ななな、何をっ!？」

呂律が回っていないことに気づきながらも、なんとかそう声を絞り出す。

「ああ、ごめん、なんか綺麗だったからつい触ってしまった。

それにしても本当に綺麗な髪だな、触ってみたいという衝動に購え

なかったよ。」

隆は気まずそうに頬を掻きながらそういった。

「~~~~~!?!?」

私は嬉しいやら恥ずかしいやらで、またしても機能停止してしまうのだった。

〈玲 side end〉

つい玲の髪を撫でてしまった。

なぜか、触りたいという衝動に購えなかった俺がいる。こんな感情、今まではじめてである。

「そ、それで隆!

学校だったよね?

すぐ準備終わるから、先に車のほうに行つてて。」

玲はいまだ動揺が収まらないのか、上擦った声でそういった。

正直、俺も今すぐ玲と顔を合わせて普通の反応ができるとは思えない。

ここは玲の言うとおりにしたほうがよさそうだ。

「わかった、先に……。

つて、車っ!?!?

まさか自動車通学かっ!?!?」

俺は承諾の返事をするつもりで、ある事実気づいた。  
か、金持ちの感覚は理解できん……。俺が切実にそう思った瞬間だった。

「……ここで待つ。」

結局俺は、玲が出てくるまでの10分間、玲の部屋の前でただただ立ち尽くすのであった。

玲の部屋の前に自分の部屋があるのだから帰ればいいものを、俺はそのときそのことを完全に失念していたのだった。

そして自動車通学である以上、登校中に妙な出会いなどあるはずもなく。

淡々とリムジン（しかも登下校専用車）にさせられ、学校へと連れて行かれるのだった。

気分はさながらドナドナの子牛の気分である。

……尤も、扱いに天と地ほどの差はあったが。

学校へ逝こう！？登校までのお話（後書き）

次回は下手をすると来週の土日あたりになるかもしれない。^^；  
悪しからず。・・・

学校へ逝こう！？再会と波乱の予感（前書き）

えと、今回すこし伏線的なものを張ってます。

違和感が残るかもしれませんが、お許しください。

そして、最後のほうでしゃべり方が急に変わります。

どうも、今日読んだ小説に感化されたようです、書いてみたくなっ  
てしまいました。^^；

変えるというなら感想にでも書き込んでください、修正いたします。

## 学校へ逝こう!? 再会と波乱の予感

### 第15話『学校へ逝こう!? 再会と波乱の予感』

で、デカイ……。

それが俺の初めに感じた感想だった。

もつとも、世界的に有名なお嬢様が通う学校がまともであるはずがない、この程度のことは十分予測できたはずだった。

それでも尚驚いたのには理由がある。

……といってもただただデカイだけなのだが。

例を挙げると、黒崎家の敷地の約10倍である。

黒崎家の敷地で、東京ドーム50個分であるからしてその大きさがいかに桁外れであるかがわかるだろう。

「お、大きいな……。」

俺は素直な感想を漏らす。

俺のもといた世界では、学校なんて大きくても東京ドーム4つつ分が限度である。

まあ、あそこは日本ほど教育に力を入れていない、ということも原因のひとつだと言えるのかもしれないが。

「つぶぶ〜、やっぱりそう思う？」

初めてきた人はほぼ確実にそういうんだ。」

玲は上機嫌な様子で俺にそう話しかける。

「・・・そして例に漏れず俺もその反応を示した、ってわけか。ところでひとついいかな？」

その話を早く切り替えたくて、そう少し強引に話を切り出す。

「うん？」

「いいよ。」

そういう魂胆など気にしないかのように玲はそう応える。

おそらく玲本人はソレを理解したうえで話に乗ってくれたのだろう。さすが、清の娘、思考能力が優れているようだ。

「なぜ校門前に無数のリムジンが？」

そうなのである。

目の前に建ちそびえる校門（玲曰く正門ではないらしい）前には、無数のリムジンが駐車されていた。

そのどれもが超高級車両と呼べる代物ばかりだ。

「ん、みんな登校用の車だよ？」

財閥とか企業の一人娘とかが多いからどうしても自動車登校になるの。」

そういう玲自身も財閥の一人娘であるのだが、玲にそれを気にした様子はない。

「ふ〜ん、さすが金持ちが集まるだけあるな。」

つまり安全のための処置でもあるわけか。  
まあ、確かにその選択は正しいと思うけど。

「金持ちが多いことは否定しないけどね。  
でも、中には一般家庭の生徒もいるよ〜?」

玲は肩をすくめながら言う。

自身もその『金持ち』であることを忘れていたのではなかったよう  
だ。

・・・尤も、気にはしていないようである。

「ふむ、そんなものか。」

その中でも5本の指に入る金持ちが黒崎財閥、ってことだな。」

俺は少量の嫌味を込めて言った。

もちろん本気で言ったのではなく、ちよつとしたジョークである。

「あははは、確かにそういうことになるんだよね〜。」

ほんと、自分でもびっくりだよ〜。」

ふむ、やっぱり玲はそのことに重きを置いていないようである。

とりあえず一安心だ、これからいろいろ世話になる相手がそれに固  
執する人だったら嫌だからな。

俺はとりあえず思考をひと段落つける。

そしてふと、辺りを見渡すのだった。

そこには鬱蒼と生い茂った草、草、草。

あたり一面、草の模倣地帯と化している空間だった。

「ところで、ここはどこだ？」

「ん……、どこだろ？」

「って、ここは……、旧庭園っ!？」

どうやら目的地へと歩いてきたはずが、まったくの見当はずれなところへと行き着いてしまったようだ。

確かに俺たち、話に夢中になりすぎる感があるからな……。

これもすべて玲の雰囲気の所為、もとい、おかげか。

「……旧庭園？」

そんなことを考えながら、俺は首を傾げながら少し当惑している玲を見る。

「えと、旧庭園っていうのは名前のとおり昔、庭園として使われてたところなんだけど……。」

そして玲は言いにくそうな表情で続けるのだった。

「……その、ね、あるときその庭園で事件が起きたらしいの。」

それはこの学園始まって以来の出来事らしくって、その事件を隠匿するかのようこの庭園は使われなくなったんだって。」

……興味本位で聞いたことが悔やまれる。

はじめに玲が驚いたのにも頷けるような気がした。

それを言った玲は本当に居た堪れない表情で俺を見つめているのだった。

「……なるほど、なんとなくわかったよ。」

ならあまりここにとどまるのは得策ではないな。」

俺はひとまずこの話を脇に置いておくとして、そう切り出した。

正直、この場においても何もプラスになることはない、少し違和感が残るが、早く立ち去るのが得策といえた。

「そうね、にしてもなんでこんなところにきちちゃったんだろう・・・？」

そう、玲は首をかしげながらも、俺とともにその場から離れるため、歩いていくのだった。

・ ・ ・ ・ ・

場所は職員室前、横には玲、目の前にはドア、そして後ろには廊下というには平均を大きく上回った通路がある。

なぜこんなところにいるのか、それを説明するには数分前にもどる必要がある。

（10分ほど前）

結局、登校した後、旧庭園と呼ばれる場所へと行き着いた俺たちは、玲の教室へと向かった。

そう、玲の教室へ、である。

「・・・あの、さ、俺のクラスってどこ？」

至極当然な疑問である。

そのとき、ふとその疑問があがってくるのは容易なことであろう。

「あ、わすれてた。」

そういえば一緒のクラスとは限らないんだよね。

それに、転校生ならやっぱり職員室に顔を出したほうがいいかも？」

という結論に至り、職員室前へと玲に先導され、たどり着くのだった。

・  
・  
・  
・  
・  
・

そして現在、職員室の前で俺と玲は一人の女性教員と真正面から向き合う。

しかし、その俺と女性教員の表情は初めて顔を合わせる2人の反応ではなかった。

その2人の異変を感じたのだろうか、玲が不思議そうに首を傾げる。

「・・・」

「~~~~」

「????」

3人は三者三様な表情を顔に貼り付けている。

隆の顔には驚愕が。

玲の顔には当惑が。

そして女性教員の顔には歓喜が。

それぞれ張り付いているのだった。

そして女性教員は喜びに満ち溢れたかの表情でこういったのです。

「ひさしぶり、隆

会いたかったわよっ」

そして、

とんつ、と隆に話しかけた女性はうれしさを体中で表現するかの「  
とく隆へと抱きつくのでした。

まだまだ波乱の予感がする・・・、そう玲は感じておりました。

そしてそれは的中するのでございます。

はたして、この女性は一体何者なのでしょうか。

今はただ、これはほんの些細な出来事だった、とここに記しておき  
ましょう。



## 学校へ逝こう！？再会と波乱の予感（後書き）

えと、作者の言い訳を少々。

更新遅くなりすみません。

完全に学校夜の9時まで残らされて勉強の日々です。

抜け出してゲーセンに行ったりなどしてません、してませんとも。

そっぴいえば『Melty Blood actresses again』が先行稼働を始めましたね。

え、そんなことどーでもいって？

早く更新しろ？

これまた手痛いご指摘を・・・。

まー、作者名でもわかるように私メルブラ信者ですので・・・。

お許しください。

完全に日記と化したこのあとがきですが、このぐらいで失礼させて頂きたく思います。

更新速くできるようがんばりますので今後とも応援よろしくお願ひいたします。^^ノ

学校へ逝こう！？謎の女性と特級クラス！？（前書き）

いや、明日からまた学校なんで早めに更新しようと一緒に書きあげました。

疲れた・・・、宿題やらずにコレを書いている私って・・・。（笑）  
まー、楽しければいいんですけどね。^^；

## 学校へ逝こう!? 謎の女性と特級クラス!?

第16話『学校へ逝こう!? 謎の女性と特級クラス!?!』

今、職員室前の空気は確かに凍っていた。

なぞの少女の突然の抱擁に、俺は不覚にも思考を停止させる。

その空間は周囲に存在する他の人を寄せ付けない絶対的なものへと次第に変わっていく。

その空気を感じ取っていないのか、はたまた感じて尚そうした態度をとるのか、それは定かではないが、その場にひとつの声上がる。

「ひさしぶり〜、元気だった、隆?」

その空気をもともせず俺に話しかけてくる謎の少女だった。

そうして抱きついたまま顔を上げ、上目遣いで見上げてくる少女。

・・・ん、コイツ、まさか!?

「・・・き、京!?!」

そう、目の前で俺に抱きついてている謎の女性は確かに俺の知った顔であった。

「ふっふ〜ん、正解!

ひさしぶりだね〜、隆〜。」

未だ抱擁を解かず、耳元でそう言う。

確かにこの顔は知った顔であり、この声もよく聞きなれた声だった。そう、だからこそ俺は固まったのである。

そのよく知った人物は、本来この場にいるはずがないのだった。

彼女こそ、隆がいた世界で、いつ如何なる時ともに在った少女、

『純神 京（じゅんしん きょう）』であった。

もとの世界で、『創造の神』と称された人物である。

「な、な、なぜここに・・・!?」

そう、だから疑問を抱くのは至極当然である。

もともと、俺はすでに1つの可能性に行き着いていたが。

「ん〜？」

そりゃ〜、貴方が好きにしるって言ったからに決まってるじゃない！

私はあなたと一緒にいる、それが一番の望みよ！」

そう、高らかに宣言する京と名乗った少女。

その少女に抱きしめられている俺。

その様子を呆然と見詰める玲。

そしてそれを遠巻きから観察する野次馬たち。

どうやら俺に安穩な生活は訪れないらしい。

「・・・わかった、確かに好きにしると言った覚えがある、好きにしたらいい。」

俺は極力不自然にならないようにそういった。

流石に、この動揺を玲に知られるわけにはいかない。

いつか話すつもりでいるが、まだ俺が別世界の人間だと、知られる

わけにはいかなかった。

「……ねえ、逆神さん？」

その方は？」

ん？

どうやらお嬢様モードへ変身したらしいな。

いや、猫かぶりモード、と呼んだほうがいいのか……？

そんな玲が、少しの警戒を伴いながら遠慮気味にそう言う。

突然俺に抱きついてきたのだから、そりゃー警戒もするだろう。

「んー、コイツは……、家族、だな。」

そう、俺は少し詰まりながらもそう言う。

なぜ詰まったか、それにはもちろん理由がある。

俺のいた世界での『家族』は、この世界の『家族』という定義とは異なるのである。

俺たちのいた世界では、心を許した人間、それ自体を家族と呼んでいた。

ここでは血のつながりのある者を家族と呼ぶらしい。

「家族、ですか……？」

玲は首を傾げながらそう、ポツリと言う。

「そう、私の名前は 純s!？」

そのとき、とっさに京の口をふさげたのは行幸だった。

「（おい、京。」

ここではお前は逆神 京だ、いいな？

俺の家に養子にきた、つてことにしといてくれ。」

京が自分の名前を言う前にすばやく訂正を入れる。

「(なんで!?)」

「(ここでは概念が違うんだ。

普通、血のつながった者以外を家族とは呼ばないらしい。)

「(へへ、変なことだね、この世界は。)

俺と京はすばやく意思伝達を終える。

その間なんと1秒たらず。

恐ろしい以心伝心振りである。

「私の名前は 逆神 京 !

一応ここでは教員をやることになってるわ!」

そう、大声(といっても差し支えない)で先ほどの決めた名前を言うのだった。

昨日の別れ際とはえらい違いである。

「・・・お姉さん、ですか?」

また、玲がポツリと呟きを漏らす。

「ああ、それはね、ちよつと違うかな。

正確には私は養子、隆のところを養子として迎えられたの。」

「ふうん、そうなんですか・・・。」

玲は少し聞いたことを後悔したように、そして京はそれを感じつつも気にしないようにお互いの視線を絡ませる。

・・・なんか、俺は蚊帳の外かよ。  
すこし憂鬱になる朝の再会だった・・・。

「って、ちよつと待て!？」

お前が教員だと!？」

そして、先の会話の違和感に気づくのがあった。

「ええ、確かに私は教員としてこの学校に勤めることになりましたわ!

これからもよろしくね!」

そう京は高らかに宣言し、俺たち2人を見つめるのだった。

「(・・・お前、俺と同じ年じゃなかったか?)」

俺は、ふと疑問に思ったことを口にする。

「(ふふつ、もう、隆たら!

女性の年を言うなんて最低ですわよ?)」

その疑問には答える気がないらしい。

おれは京の言葉から、瞬時にそのことに行き着くのがあった。

「マジかよ・・・。」

俺の眩きがどこかへと消えていく。

まるでその言葉などこの場に存在しなかったかのように、誰もそれに反応するものはいなかった。

「ちなみに、あなたのクラスは2年X組ですわ！」

京はそんな俺を気にもせず、そうクラスを告げ、職員室へと消えていくのだった……。

「……………」

そうして取り残された俺と玲は、自然とお互いを見詰め合う形になる。

そしておもむろにこういうのだった。

「……………教室、いこっか。」

と。

……………

所変わって2年棟の2年X組教室前

「ここ、か？」

そう、疑問の意を乗せて呟いたのは俺。

「ええ、ここよ？」

そう、返事とも取れる返答をしたのは玲。

そしてその俺たち2人の目の前には巨大な鉄の門が立ちはだかつていた。

「これは・・・、一体？」

俺は、初めて見た人の9割が当然感じるであろう疑問を口にする。

「ここはね、この学園でも特にセキュリティに特化した棟なんだから。」

ここに入る人は誰もが超お金持ちなのよ。

それも世界レベルの、だよ？

すげえよね〜。」

そう俺の横でいう玲。

彼女自身も超金持ちであることを俺は知っている。

そしておそらくこの棟で一番の金持ちである、ということも。

「よく特級クラスって呼ばれてるよ。」

X組ってというのはXが未知を表すことからつけられたんだって〜。」

そう玲が意味のあるのかそうでないのか判断しにくいことを言う。

「なるほど・・・、金持ち専用クラスってわけか・・・。」

「まー、簡単に言えばそういうことになるかな。尤も、難しくいってもそうなるけど。」

ちなみに、通称『特級クラス』って名付けたのは理事長らしいよ?」

そう玲が惚けてみせる。

そして、玲の顔にははつきりと笑顔が浮かんでいた。

しかし俺はそのとき、ふと疑問が頭を過ぎった。

「・・・コレ、どうやって開けるんだ?」

目の前にそびえる扉は、人の手よって開くことができるレベルを大きく逸脱しているのだった・・・。

学校へ逝こう!？〈魅了〉の能力者（前書き）

ごめんなさい！

結局頑張るとか言って約1週間ぐらい書けませんでした・・・。  
その代わりとってはなんです。が今回はちょっとだけ長めです。  
これで勘弁していただければうれしいです・・・。

## 学校へ逝こう!?! 《魅了》の能力者

第17話『学校へ逝こう!?! 《誘惑》の能力者』

「じゃ逆神くん、入ってきて。」

目の前のドアの向こうから、俺のクラスの担任がそう告げる。

そう、俺は今通称『特級クラス』ことX組のドアの前にいる。  
転校生紹介の為にここに一人取り残されている。

正直、これに何の意味があるのか理解することはできない。

「おゝい、逆神くん?」

クラス担任はさきほどの事件の張本人、『純神 京』である。  
もともと、こつちの世界では『逆神 京』を名乗るようになってあ  
るが。

にしてもあの扉には驚いた……。

まさかあんな仕組みになっているなんてな。

俺たちの世界じゃありえない仕組みだよ。

何なんだ、静脈スキャンって?

暗証番号だと?

声紋認識装置?

ちんぷんかんぷんである。

このときほどココロが違う世界なんだと自覚したことはなかったね、いやホント。

「隆！早く入ってきなさい！」

バンツ！と音を立てながら、突然目の前のドアが視界から消える。そしてドアのあった場所には京の怒りの表情があった。

「……あ、ごめんごめん、ついつい思考に没頭してた。」

（口調が元に戻ってるぞ？）

（……仕方ないじゃない、こんな口調今まで遣ったことなかったんだから！）

俺は苦笑しながらそう言う。

どうも最近考え込むことが多くなった気がする。

「もう、しかたないわね……。」

改めて紹介します、転校生の『逆神 隆』くんです。

隆くん、自己紹介お願い。」

「はい、昨日この町にやってきました『逆神 隆』です

学期途中からの編入なので変に思われるかもしれませんが、特になにか理由があるわけではありません。

あえて挙げるとすれば海外に住んでいました。

ちなみに、担任は私の姉です。

尤も義理の、ですが。

今後とも、よろしくお願いします。」

そう、俺は黒板に名前を書きながら言う。  
転校生にとつての初行事である。(・・・正確には行事ではないが)  
尤も、そもそも学校になど通っていなかったのだ。  
転校の理由なんてあるはずがない。  
多少の誤魔化しが利くように海外からの帰国子女にしたのはいい判  
断だったと自分でも思う。

「転校生だつて。」

「しかも帰国子女ですつて。」

「本当、そういえば私も最近海外へ行つてませんわ。」

「そういえば今朝、黒崎さんと一緒に登校してきたんですつて。」

「へー、彼が噂の人か。」

「超美系だな。」

「・・・羨ましい。」

といった声で、教室がざわつく。

ふと玲のほうを見ると、昨日までの態度が嘘のように猫をかぶつて  
いる。

クールで冷淡、同学年とは思えない威圧感から、その場だけ隔離さ  
れているかのような錯覚さえ覚えた。

「せんせー、彼に質問いいですか？」

声のしたほうへ視線を向けると、窓側の女子が手を挙げて京へと進

言しているところだった。

「ええ、かまいませんよ。」

「限目は私の授業なので少し時間をあげましょう。」

と、京は応え、黒板横のイスへと腰掛ける。  
「どうやら話を進める気はなさそうだ。  
となると当然、」

「ねーねー、どこから来たの？」

「出身は？」

「あなた、能力持ってる？」

「今度一緒に食事でも行こう！奢るぜ？」

「黒崎さんとはどういう関係だ！？」

「……禁断の？」

転校生が囲まれるのは当然の摂理である。  
「つてか最後の奴、どんな答えを期待してる？」

「えと……、出身は日本です。」

仕事の都合で先週までスイスにいました。

黒崎さんとは友人です。

能力は持つてゐることは持つてますが、詳細は秘密です。」

質問の嵐に、俺は一息で答える。

最後の質問は完全無視だ、アレはほっとこう。

「はいはい、質問したりないだろうけどそろそろ授業を始めます。」

京の一言に、俺に群がっていた人の群れは散っていく。

なぜこつも生徒に対して、教師の発言は影響力が強いのだろうか？

そう、疑問に思う俺だった。

・ ・ ・ ・ ・

キンコーンカーンコーン

突如として、京の声だけが響いていた教室にチャイムの音が鳴り響く。

授業終了の合図である。

「じゃー、今日はここまで。」

続きは、えーっと、明日ありますね。

では明日やりますのでちゃんと復習してくるように。」

そう京が終わりを告げた。

ただ今の時間、12時40分。

4限目が終わり、昼休みに突入した瞬間でもあった。クラスの大半は、各自思い思いの場所へと移動を開始する。気の合う仲間と机を合わせる者、友人とともに学食へといく者、購いでパンを買い屋上へと赴く者。

そんなクラスメイトを眺めつつ俺は朝、玲が用意してくれた弁当を開く。

玲が用意してくれた、とあるが、実際に玲が作ったというわけではない。

作ったのは玲の母親の沙理さんである。

「隆、どうせだから食堂で食べない？」

ふと声のしたほうへと顔を向けると、そこには玲の姿が。尤も、この学校にそれを俺に言える人はほかにいないが。・・・あ、京も言えるか、ここにはいないけど。

「ん、わかりました、行きましようか。」

そう答え、玲の横に並ぶ。

「ねえ、学校ではそのしゃべり方で通すつもり？」

歩きながら玲が小声でそう言う。

やはり普段の俺を知ってるから違和感があるのだろう。

俺が玲に違和感を感じているように。

「それはお互い様だろ。」

いいんだよ、俺はコレで。」

そう呟き歩く速さを速める。

「・・・屋敷では戻してよね。」

玲は釈然としないものを感じつつ、俺に合わせてため足を速める。

「わかってるぞ。」

「ならいいよ、私も学校では猫かぶってるからお互い様だね。」

玲は自分の考えにひと段落付けたのか、ひとつため息をつきながらそういった。

・  
・  
・  
・  
・  
・

食堂へ入った俺たちを迎えたのは超ナルシストの美青年だった。

・・・いや、嘘でも冗談でもない。

目の前には美青年が立っているし、青年がナルシストであるということも確証済みである。

周りには女子がうっとりとした目で青年を見ている。

青年も、その視線が気持ちいいのか、どこか酔ったような顔で笑みを作る。

その場の雰囲気強烈な違和感を覚える。

周りの女子の目は、ほとんど宗教信者のそれだった。

正直、背中に鳥肌が走ったよ……、殴り倒してやりたい気分だ。

「……まさか彼と出くわすなんてツイてない。」

玲が横でボソツと呟く。

「え、なんでです？」

確かにとても自意識過剰な方だとは思いますが……。」

いいかけて俺はあることに気づく。

青年の右目が赤く輝いているのである。

これは……、魔眼系能力、か……。

なるほど、『魅了』の魔眼とでも言うべきか、この周りの異様さもすべてコイツが生み出したというわけか。

「……なるほど、『魅了』が彼の能力ですね？」

にしてもこんなところで起動するなんて彼は何を考えているんでしょうか？」

俺は疑問に思ったことを素直に口にする。

「何も考えていないのよ……、だからこそたちが悪い……。  
誰かまわす使っんですもの、巻き添えを食らわないように逃げましょう。」

そう玲は言つとすぐさま踵を返そつとする。

よっぽどこの青年にいやな思い出でもあるのだろうか。確かに、みていて気分のいい能力ではないが。

そう、そんなことを考えていたから気づかなかった。

そう考え事をしている隙に青年はこちらに近づいてきていることに。。。

「これはこれは、玲さんではないですか！  
お元気ですか？」

少々時代錯誤的な挨拶を繰り出す青年。

青年は玲に視線を向けたまま玲の反応を待つ。

「……気安く名前を呼ばないで頂戴。

あなたの遊戯に付き合ってる暇はないの、気分が悪くなる。」

玲は冷たく言い放つ。

今回ばかりは俺も同感である。

「いやはや、お厳しい……。」

そんなことばかり言っていると、私にも考えがありますよ?。」

そう青年が言った瞬間、青年の右目が鈍く光るのを俺は見た。

「どつなるといのでs……!??」

そこまで言つて、急に玲の動きが止まる。

今までの優雅な物腰は失われ、回りの女子のような目で青年を見つ

める。

「ふふふっ、油断しましたね。

あなたの能力はたしかに強い、だが一度我が魔眼に魅了されれば動くことなど不可能。」

俺のことなど眼中にない様子の青年。

一方俺は、玲に突然力を使った青年、人の心考えない能力の行使にキレかかっていた。

そして玲に触れようと青年が手を伸ばしたとき、

「おい、貴様。」

俺は低く鈍い声色で青年に声をかけるのだった。

学校へ逝こう!?!? 《魅了》の能力者(後書き)

来週こそはもっと更新スピードをあげるぞ!

という意気込みだけ書いときます。

できればそうしたいなあ・・・。

学校へ逝こう！？真の能力の片鱗！？（前書き）

ヤバイです、スランプです・・・。

ぜんぜんうまく表現できません。；；；

そして戦闘パート10割の今話。^^；

戦闘だけになるなんて思っても見ませんでした、反省してます。；；；

ちなみにこれ、番外っぽいんで読まなくても問題ありません。

・・・尤も、前話の続きではありませんが。^^；

飛ばすなら前話から、ってことになります。^^；

## 学校へ逝こう!? 真の能力の片鱗!?

第18話『学校へ逝こう!? 真の能力の片鱗!?!』

「おい、貴様。」

青年が聞いた俺の言葉は、殺意を多量に含んだものだった。さすがにそれを感じ取れる程度のレベルはあったのか、玲に伸ばさうとしていた手を戻す。そしてゆっくりとこちらへと向き直るのだった。

「誰だキミは？」

私は今、やっと欲しかった物が手に入ったところなんだ。邪魔をしないでくれないか？」

青年はそう、不満げに言う。

玲をものとして扱うコイツは、到底俺にとって許せるものではない。」「

『常に弱き者の味方であれ』

俺の唯一尊敬していた男の口癖だった。

コイツのしていることはそれを真っ向から否定することだ、到底許せるものではない。」「

「すぐに、その、能力を、解け。」「

俺はわざと言葉を区切り区切り言う。

「はははっ、嫌だね。

なぜ貴様の言うことなんぞ聞かねばならんのだ。

俺は男を魅了するのは好きではないんだ、さっさと消えろ。

さもなければ貴様を亡き者にしてくれようぞ。」

よく間違われるが、魅了の能力は何も相手を洗脳するのが主な使い方ではない。

魅了するのはあくまで対象自身。

それが人であろうとなかろうと関係ないのである。

一定のレベルで、その空間に存在するすべてのものを支配下に置く、それが魅了の能力の真髄である。

尤も、この男はそこまで広範囲のものを操ることはできないようだが。

「できるものならやってみるがいい。

俺は久々にキレたよ……。

貴様に地獄を見せてやろう。」

そついいながら俺は笑みを浮かべ、周囲に空間の歪みを作り出す。

本来、空間とはその場に存在することが決まっているモノである。

その均衡を、一度乱そうものならば、その場に膨大な歪みが現れる。ゆえにそれを能力によって無理やり起こし、その歪みを増幅させたのだ。

「何!？」

貴様も能力者か!？」

青年は俺に向かって『魅了』したイスを吹き飛ばす。

俺はそれを左に飛んでかわし、青年へと駆ける。

と思わせその残像だけを残し、俺は青年の背後へと能力を使い転移する。

「ふっ！」

青年の背後に現れた俺は、上段蹴りからの後ろ回し蹴りを繰り出す。その軌道は一段目を後頭部、二段目を鳩尾へ、という一撃必殺を体現する体術だった。

この戦い方は以前、向こうの世界で覚えたものである。

無論、これも真打ではない。

次の一撃への布石である。

「ふんっ！」

こんなもので倒せると思うな！」

そう叫びながらあたりの机を盾にしその攻撃を防ぐ。

どうやらそれなりに戦いなれているようだ。

おおかた、喧嘩に使用していたんだろう。

「ふん、この程度！」

そういいながら、俺は現れた机ごと奴の鳩尾を蹴り抜く。

そして周囲に作り出していた空間の歪みを、青年の目の前へと転移させる。

空間の歪み、それが寄り集まることにより高密度なエネルギーへと形を変える。

そのエネルギーは、一番近くの物体、つまり俺に鳩尾を蹴られ、うずくまっている青年へと流れ込むのだった。

エネルギー体をモロに受けた奴は、体をくの字折り曲げながら壁へと吹き飛んでいった。

「ぐはっ!？」

青年は勢いよく壁に激突し、息を詰まらせる。  
どうやらモロ鳩尾に入った部分へとダメージが集中したのだろう。  
腹を押さえながら苦しそうに立ち上がる。

「もう気が済んだらろう、さっさと魅了を解け。」

俺は慈悲深くもそう、逃げ道を指し示す。  
尤もこの手の人間は、下手に逃げ道を示すと逆ギレし、襲い掛かってくるものである。

今回はそれをするために逃げ道を提供する。  
われながら少しえげつないと思わなくもない。

「うるさい!

聞く耳持たんわ!

貴様だけは許さんっ!」

予想通り、青年はその言葉にキレ、襲い掛かってくる。  
青年は目を赤く輝かせながら俺にむかって吼える。  
どうやら理性すらも飛んでしまったらしい。

「これでも食らえ!!!」

そこで少しの誤算が起こる。

青年は、あるうことが魅了した人間自体を特攻させてきたのである。

見覚えのない少女が、食事用のナイフを俺に向かって突き立てようと腕を振り上げる。

「ふっ！」

能力を使い、空間を固定。

少女の動きを止めると、それを殴るわけにもいかずひとまず距離をとる。

そして、俺の中の何かがうずきだした。

この外道を見逃すわけにはいかない。

そのことだけが俺を支配する。

「貴様、どこまで落ちれば気が済むんだ……。」

いいだろう、そこまで叩きのめされたいというのなら俺が望みどおりにしてやるうじやないか！」

そう俺は高らかに宣言し、左手を虚空へと伸ばす。

バチッ！バチバチッ！！

そう音が響いたかと思うと、俺の目の色が変化する。

そう、あくまで変色ではなく、変化である。

それは同時に俺の戒めが解かれたということでもあった。

「消える……。」

俺はそう呟くと左手を魅了された人々へと向ける。

ただそれだけの動作で、魅了の能力は打ち消される。

俺の持つ真の能力、『想力』の力が発動した瞬間だった。

尤も、この能力に決まった形など存在しないのだが。

己のイメージ、それを具現化する能力、それが我が『想力』の力で

ある。

「そ、そんな・・・、馬鹿な・・・!？」

青年は呆然と立ち尽くす。

「元凶たる貴様はしばし頭を冷やしてこい！」

そう言つて、こちらの世界で能力としている『空渡り』を起動させる。

転移させる場所、それはここから10キロほど離れた川の真上である。

「ま、まで、俺h・・・!？」

青年は最後まで言葉を言い終われずに、虚空へと消えていった。

この時期、風邪を引くほどの水温じゃないだろうから大丈夫だろう。

・・・泳げない、とかでさえなければだけど。

そう、思考をひと段落させると、玲を探す。

探す、といつてももともとここにいたのですぐに見つかるだろう。

そう考えながら、俺はあたりを見渡すのだった・・・。

・  
・  
・  
・  
・  
・

「ほんと、相変わらず出鱈目な能力者だよー、隆って。」

玲と再会し、初めての言葉がそれだった。

・・・あの、玲さん？

あまりにもひどくはないですか・・・？

「何がひどいの？

隆、自分ではわかってないかもしれないけど、魅了系の能力者を戦闘向けでない能力者が倒すなんて普通では考えられないんだよ？」

そう、玲に諭される。

「なんだか、自分が悪いことをした気になってしまっじゃないか・・・」

「まー、でも助かったよ。」

私もさすがにああいう能力は苦手だから・・・。」

それはそうだろう。

玲の能力は引斥力である。

ああいった、精神系は苦手とするところである。

「ん、まあ無事で何よりだ。」

それにしても、いつもこんなことがあるのか？

さすがに不安になるんだが・・・。」

「今回は異例の事態だよ。」

この学園のトップクラスの能力者がこんなことをするなんて考えられない。」

そう玲は心底疲れたかのように言った。  
確かに精神系は心労が半端ないからな……。

「さて、じゃー、教室に戻ろうか！」

玲は気分を入れ替えたのか、そういった。

「ああ、そうだな。

だがその前に口調、ちゃんと戻しとけよ？」

そう、少し意地の悪い笑みを浮かべながら玲にそう言うのだった。

………とこころで、メシ、食って無い、よな？

学校へ逝こう!？玲の友人（前書き）

結局1週間ほどたってしまいました・・・。

やはり学校が夜遅くまであるとなかなか執筆時間が取れませんね・・・。

今後とも頑張りますので応援よろしくお願いします。

## 学校へ逝こう!? 玲の友人

第19話 『学校へ逝こう!? 玲の友人』

「あ、騎士<sup>ナイト</sup>様の帰還だよ!」

俺達が教室へ戻ってはじめて耳に入ってきた言葉は、あまりにもなじみの無い言葉だった。

「本当だ、何でも囚われの氷姫様を悪漢から助け出したのだとか。」

うん?

この学校には騎士なんて呼ばれる人間がいるのか?

そして氷姫?

誰だそれ。

そうして俺は、声のする方向へと顔を向けた。  
すると、

「きゃー! 騎士様がこちらを見ましたわ〜」

「本当、それにしても氷姫様と並んで絵になる方なんて初めてですわね。」

という、声が新たに発せられる。

俺はその会話をしている女子達の反応に違和感を感じながら自身の机へと向かうのだった。

氷姫様？

騎士様？

絵になる？

駄目だ、さっぱり意味がわからない。

「あの、玲さん。

この学園には、騎士や氷姫と呼ばれる方がいらっしやるのですか？」

悩んでいても仕方がない。

俺は玲にその疑問を聞くことにした。

「え、えつと、それはね……。」

そういうと、玲は言いづらそうに口ごもる。

どうやら聞いてはいけないことだったのか？

俺たちの間に気まずい空気が流れるのが感じ取れる。

だからといって一度言った言葉を戻すこともできず、ただ2人、その場に立ち尽くすのだった。

居心地の悪い、しかし逃げることはできない、そんな空間が出来上がる。

残念ながらこの空間だけは、俺の能力でも転移することはできないだろう……。

何気に俺が初めて自身の能力で実現できぬことに出会った瞬間だった。

正直そんな瞬間、訪れてほしくはなかったが。

「やつほー、お二人さん  
食堂では災難だったね。」

そんな中、居心地の悪い空間を物ともしない軽快な声が教室に響き渡る。

その声の正体は、小柄な少女だった。  
小さな体にかかるぐらいの髪、小さな顔に大きな瞳、その姿はどこか小動物を彷彿とさせるのだった。

「ああ、夏海でしたか。  
もうその情報を知ってるのね……。  
本当、勘弁してほしいわよ。」

玲はため息混じりにそう返す。  
確かに、アレは精神的にきついものがあるからなあ……。  
あの変態ナルシスト、何が厄介ってあの性格もだが、何より人の話を聞かないところである。

そうして少女と玲は親しそうに会話を始める。  
どうも知り合いのようだ。

正直、玲にこんな友人がいたなんて意外である。

「ところで、そっちの人がうわさの転入生？」

玲と話していた少女が俺のほうを向きながらそういう。

「ええ、ちょうどいいから紹介するわ。」

彼の名前は『逆神 隆』。

隆、彼女の名前は『壬生 夏海』、不服ながらも一応、私の友人ね。

そういいながら玲は少女に目配せをする。

「こんにちは、隆くん。」

私は壬生夏海、夏海って呼んでもらっていいよ。」

そういいながら右手を出す。

俺はその手をそっと握り、握手を交わす。

「こちらこそよろしくお願いします。」

俺はあくまで紳士的にそう返す。

最近忘れがちになっているが、俺のモットーは『如何なる時も紳士であれ』である。

「うん、よろしくね。」

ところで、隆くんは何の能力者なの？」

少女は唐突にそう、質問を繰り出すのだった。

「ん？」

夏海さんも能力者なんですか？」

俺はほぼ直感でそう返答する。

どうもこの学校は能力者が多いみたいだな……。

玲といいさっきのナルシストといい、割合的には異常だな。

「ま、そういうことさ。」

で、何の能力なの？」

ちなみに私は思念を相手に飛ばす能力だよ。  
所謂テレパシーってヤツ。

この頭の中に響く声が、彼女の能力なのだろう。

少女はそういういながらカラカラと笑う。

何が可笑しいのかわからないが、少女を見ていると警戒心が薄まるから不思議である。

「テレパシーですか。

珍しい能力ですね。

私の能力は『空渡り』です。

所謂空間転移ってトコですね。」

俺はそう答えながら、机にあったペンを手元へと転移させる。

実際は、この世界に存在するすべての事象を引き起こすことも可能であるが。

「へー、すごい能力だね。

でも戦闘向きの能力じゃないのにあの変態ナルシストを倒すなんてやるね。」

そう、少女は感嘆してみせる。

「ところで何なのこの雰囲気、なにかあった？」

そう、半ば話しに割り込む形で玲が言う。

なぜか執拗に夏海に問い詰める玲だった。

玲の周りには先ほどのペンが不自然な形で浮遊していた。

確かに、午前中はこんなざわわしてはいなかった。

・・・俺の転入で多少のざわめきはあったが。

それにしても玲よ、なぜ能力を発動させている？

「にははは、この話の張本人達が何言っちゃってんのよ。」

少女の思いがけない答えに、俺たち二人は顔を見合わせる。  
そして二人同時に首を傾げるのだった。

「変態ナルシストにとらわれた氷姫を颯爽と現れた騎士が救い出す！  
今はそんな噂で持ちきりだよ？」

夏海はそう言いながら少し邪な笑みを浮かべ、こう続ける。

「氷姫こと黒崎玲と、転入初日から玲とともに登校してきた逆神隆。  
それだけでも十分噂される要因になってるというのに、極めつけの  
食堂での一件。」

これはもう、噂されて当然でしょ？」

夏海はニヤニヤと笑いながらそういう。

「。。。。。」

その反応と正反対の反応をする玲。

「?????」

いまだ状況をつかみきれていない俺。

その3人でまともな会話が成立するはずもない。  
しばらくの間、この状況が続くのだった・・・。

・  
・  
・  
・  
・  
・

「ってちょっとまって!？」

その膠着状態からいち早く復帰したのは俺だった。  
というのも、先の話に違和感を覚えたからである。

「騎士様ってだれ!？」

俺は一抹の不安をもちながらそういう。  
正直に言うと、俺の中ではひとつの可能性に行き当たっていた。  
ただそれを認めたくないだけである。

「なーにをいまさら〜  
隆くんのごとにきまつてるよ」

自身の仮説を否定してくれるのを期待していた俺に、しかし仮説ど  
おりの答えが返ってくる。

「お、俺が騎士!？」

驚きのあまり、地が出てしまう俺。

しまった、と思ったが、どうも夏海は気にとめてはいないようだ。

「そうだよ、だって玲があの変態に捕まったとき、あなたが助けたんでしょ？」

確かに助けた覚えはある。

だがその程度で騎士、などと呼ばれるなんて俺には考えられない。

そりゃ、玲が姫ってのは分かる。

見た目もピツタリとっていいと思う。

だが俺が騎士なんてイメージに合わないにもほどがある。

「まーまー、名誉なことじゃない

そんな呼び名、普通は貰えないよ？」

夏海は未だニヤついた笑みでそう答える。

「そついう問題ではないでしょう……。」

どうやらもう否定できる段階ではなくなってしまっているようだ。今後のことを考えると、頭の痛くなる俺だった……。

そのころ、玲はというと

「隆が騎士で私が姫……？隆が……。」

と、頬を朱に染めながら、うわごとのように呟いていたとき。

おい玲、ちょっと猫の皮が剥がれてきてるぞ？

前途多難な学園生活は、まだ始まったばかり・・・？

学校へ逝こう！？玲の友人（後書き）

リアルで模擬面接がありました。

何も内容を考えずに臨んだところ、緊張のあまりなにもできませんでした……。

やはり準備は大切ですね、痛感しましたよ、ええ。

噛みまくりの、詰まりまくりでした。^^；

学校へ逝こう!？放課後の教室にて（前書き）

すみません

1ヶ月以上放置してました・・・。^^;

というのも、受験が近づきましてとても執筆できる状態ではない、  
というのが1番の理由です。

といいつつ第20話です、ハイ。^^;

一応読んでくれればうれしいです^^ノ

## 学校へ逝こう!? 放課後の教室にて

第20話 『学校へ逝こう!? 放課後の教室にて』

昼休みの騒動も一応の落ち着きを見せ始め、生徒たちは皆熱心に教師の授業に耳を傾ける。

元々良家の者しか割り振られないクラスである為、基本的に皆『良い子』なのである。

・・・価値観の違いという面においては世間一般との違いに恐ろしいものがあるが。

そんなX組こと通称特級クラスの面々は静かに授業を受けているのだった。

・・・ただ一人を除いては。

「ふわぁ・・・」

窓際の席に、そう欠伸をし窓の外を眺める男子生徒の姿があった。彼の名前は 逆神 隆、いわずと知れたこの物語の主人公である。普通の高校であれば、今日最後の授業である為多少その様子を目にすることもあるだろう。

だがこの学園に限っていえば、そのようなことをする人間は稀であるようだった。

これだけ聞くと、隆が勉強を出来ないとお思いの方が多いことだろう。

だが実際は少し事情が異なるのだった。

（あくあ、眠い……。）

そんなことを考えながら、隆は熱心に授業内容を説明する教師を一瞥する。

（まさかここまでこの世界の学力が低かったとは……。）

そう、隆にとってこの世界の学力レベルはすでに習得済みだったのである。

といっても、隆自身それに気づいたのはつい先ほどのことであるのだが。

というのも午前中の授業はそのほとんどが語学系であった為、隆本人が学習したことのある教科に出会う事がなかったのである。

この学校の午後の授業の初めはホームルームと決まっているらしく、今日最後の授業である6限目の数学でやっと、その事実が発覚したのだった。

（なるほどな、京がここで教師を出来る理由がやっと分かったよ。

普通ならそんな簡単に教師なんて出来ないからな……。）

そう一先ず考えをまとめると、顔を教室前方へと向ける。

教室の前方では、いまだ教師が熱心に教鞭を振るっている様子が見て取れる。

その様子を一瞥すると、また隆は窓の外へと視線を向けるのだった。

余談であるが、その外を見つめる隆の姿は1枚の絵で在るかのよう

だった、と周囲の人間は後に語る。

・ ・ ・ ・ ・

カラン、カラン、カラン

授業が始まって50分。

突如教室内に、いや、正確には学園内に鐘の音が響き渡る。

「ん？もうそんな時間ですか。

では今日はここまでにします、1週間後にはテストがありますので  
皆各自勉強しておいて下さい。」

どうやら授業終了の合図のようである。

・ ・ ・ ん？

なにか今、不穏な言葉が聞こえたような・・・。

「では、ありがとうございました。」

「「「ありがとうございました」」」

そう教師は告げてから教室を後にする。

どうやらこの学園では教師のほづが礼をするようである。

「隆」

そう意味のない考えを巡らせていると、玲から名を呼ばれる。

「何です、玲？」

唐突に声をかけられた隆だったが、ある程度予測していたのか普通に答える。

「今から夏海たちとあなたの歓迎会をやるつということになったのだけど、時間はいいかしら？」

そう告げながら、自らの腕時計を隆に見せようとするのだった。

そう、腕時計を、である。

そして自然な動作で隆の横に体を寄せる。

元来、腕時計は他人に見せる物ではない、当然、見せるように作られてはいない。

それを見せるためには体を寄せなければならぬ、当然の動作ではある。

尤も、周囲がそれをどう受け止めるかはまた別の話である。  
あるところでは、

(みましたか！？あの氷姫様自ら体を寄せに行きましたわよ！)

とか

(騎士様と氷姫様の2ショット・・・、お美しいですわ。)

とか

（あの氷姫様がですか・・・、よほど騎士様のことを御信頼されているんですね。）

などといった声が至る所で上がっている。

放課後になったというのに、未だ教室を出ようとする人間は皆無だった。

・・・尤も、当の本人たちは気づいていないのだが。

「で、どうです？」

「ええ、かまいませんよ、喜んで参加させて頂きます。

大体、歓迎会なのに私が参加しないというのも変な話ですし。」

どうやら2人の会話がひと段落着いたようである。

そこへ、

「やつほぐ、2人とも、仲が宜しい様で。

周りの目も気にしたほうが良いんじゃない？」

そうでなくても、昼の一件で2人は有名人だからさ。」

軽快な声が響くのだった。

そう、壬生 夏海 その人である。

「あら夏海、どういふことかしら？」

「夏海さん、どういふことですか？」

玲と隆の声が重なる。

「ははっ、ホント仲いいね。」

というか気づいてないんだ〜、もしかして2人とも天然？」

「「????」」

2人は何のことが分かっていないようである。

尤も、天然というよりは鈍感だろう、と周囲の目は言っているのだが。

「まーまー、それはりあえずおいて置くとして〜。

迎えの車が着たから、そろそろ行きましようか〜。」

ニヤニヤと顔に笑みを浮かべながら、そう2人に告げるのだった。

「そうですか、では行きましよう。」

そういうと、玲は隆の手をとり颯爽と歩き出す。

その2人の後姿を眺め、

「ふふっ、あの玲があんなことをするなんてね〜。」

ニヤリと口の端を緩ませながら、2人の後に続く夏見だった。

2人に追いつくことはせず、あくまで見失わない程度に距離を空けながら……。

・  
・  
・  
・  
・

所かわって歓迎会会場へ移動中の車内。

「でね、2人が教室に帰ってきたときの周りの反応っていったら無かったわよ」

夏海が隆と玲の話先ほど紹介を受けた女子2人に話している。

確か、菊池 咲（きくち さく）と 佐久間 蓮（さくま れん）である。

何でも、咲は日本舞踊家元の娘。

蓮は日本人とフランス人のクウォーターらしい。

2人とも十分に美人の部類に入る容姿である。

その咲と蓮は食い入るように夏海の話に聞き入っている。

「ちよつと夏海、やめなさい。」

玲がそう、夏海を止めようとするが、

「いいじゃない、減るもんじゃないんだし。」

玲のこういった話なんて今まで無かったんだから、もう少し楽しませなさいよ。」

と、本人の意思を無視しての暴露会（少なくとも隆本人はそう思っている）を始めるのだった。

「玲、居心地が悪いです……。」

隆は女子4人に男子1人という状況に耐え切れなくなったのか、玲にそう小声で告げる。

「ごめん・・・、この娘、こういった話が大好きなの・・・。  
基本的に悪気は無いんだけど・・・。」

と、玲は申し訳なさそうに言う。

尤も、玲本人もこの暴露会の生贄とされている。

隆はあまり強くも言えず（もとより言う気は無かったが）、ただただこの車が早く目的地へつくことを願うのだった・・・。

学校へ逝こう！？放課後の教室にて（後書き）

今後ともよろしくデス

執筆、ガンバル

学校へ逝こう!? 歓迎会会場は

!?(前書き)

えと、四季咲さんから感想評価いただきました。  
更新再開して初です。

ほかに、更新停滞中に、SINさんとふじこさんから感想評価  
いただきました。

ありがとうございます

学校へ逝こう!? 歓迎会会場は

!?

第21話 『学校へ逝こう!? 歓迎会会場は

!?!』

どれくらい車に乗せられていただろう。

周囲の光景が慌しく変わる中、車内の光景だけはほとんど変化を見  
せていなかった。

目の前に夏海、その両隣に咲と蓮が座り、昼の出来事を夏海が尾ひ  
れをつけ話している。

そして俺の横には玲が、目を閉じながら座っていた。  
その玲の手はさりげなく俺の左手に添えられている。

正直、1人だけ孤立しているような状況である。

この玲の手の暖かさが今の隆にとって救いのように思えた。

「でね、騎士様って名前がつけられたってわけ。」

「へへ、だからナイトなんだー。」

「・・・どおりで騒がれるわけ。」

そうして一通りの話を終えたのか、一仕事終えたような表情で夏海  
がこちらを見る。

どうも彼女は噂話が好きなようだ、顔が活き活きとしている。

「やっと終わりましたか・・・。」

そこまで大したことで無いですから、もっと簡単な説明でいいじゃないですか……。」

つつい隆はそう、口にする。

やはり精神的に結構参っていたようだ、恨めしそうに夏海へと非難のまなざしを向ける。

そんな中、未だ車は速度を落とすことをせず、ほとんど揺れも無い車内では考えられない速度で国道を走り続けていた。

「そんなことないです!」

突然叫ぶように隆の言葉を否定する声が響く。

驚くことにその発信源は夏海ではなく、夏海のすぐ右隣に座る咲からだった。

その声の大きさに驚いたのか、玲も目を開け咲のほうへ視線を向ける。

猫をかぶる玲にしては珍しく、驚きの表情を見せていた。

「……咲、声大きい。」

蓮の無感情の一言。

「う……、ごめん。」

ようやく、自分が叫ぶに近い声を出したことに気づいた咲は小さく謝る。

「……でも私も同意見、それは凄いこと。」

咎められたと思った矢先に賛同され、咲は目を丸くして蓮を見た。

「・・・何？」

私は咲の意見を否定したわけじゃなく、声が大きかったから咎めただけよ。」

そう言つて、蓮は少し意地の悪い笑みを浮かべる。

どうもこの少女、咲を弄つて遊ぶのが好きなようである。

確かに咲は弄りやすいキャラかもしれないが。

「2人とも、楽しそうね・・・。」

いえ、3人といったほうがいいかしら？

私達を笑いものにして・・・。」

玲が疲れたようにそういつた。

その反応を見て、焦つたのは咲と蓮の2人である。

その実、ただテレしているだけだ、と隆は見破つたが2人には本気でいつているように見えたようだ。

「い、いえっ！そ、そんなつもりでは!？」

見るからに焦りまくつてゐる咲。

事情を知らぬ者がいれば、それはとても挙動不審に見えただろう。

「・・・笑つつもりは毛頭無かつた。そう思つてたのは夏海だけ。」

と、感情を感じさせない声でそういつ言つ蓮。

ただし後半に罪を擦り付ける部分を入れるあたり、彼女の腹黒さを感じさせる。

「はははっ、冗談だよ、そうだよな、玲？」

と隆が助け舟を出す。

「ええ、冗談よ。

咲と蓮に怒るはずないじゃない。

夏海は別として。」

と、咲と蓮を快く許し、代わりに夏海へと詰め寄る玲。

「って、あたしっ!?!」

と、突然のターゲット変更慌てる夏海。

『何を今更……、原因はアンタだろう……。』というのは隆の心の声である。

しかし夏海は本当に悪いと思っていないようで、弁解を始める。

「いや、何でそうなるわけ!?!」

私はただ、騎士様の活躍を2人に語っただけでしょう?

こんな面白い話、話さないほうがおかしいよ!?!」

と力説する。

恐ろしく空気の読めない発言であった。

「ふふっ……、私、今すぐ頭にきてるの……。

咲と蓮は別に怒るつもりは無かったのよ。

でもね、諸悪の根源は潰さないといけないと思うの……。」

玲は右手に持つグラスを能力で浮かすと、

「一度、貴方には教育的指導をすべきだと前々から思ってたのよね・

「。。。」

そう言いながら目を細める。

両側に座っていた2人は、危険を感じたのか、隆の傍に退避している。

ねー、もしかして私、墓穴掘った？

ええ、完全に。

助けてくれないかなー、とか思ったり？

自業自得ですよ、神妙にお縄についてください。

と、テレパシーを飛ばしてくる夏海を一蹴し、目を閉じる隆だった。

その後、夏海の行方を知る者はいない。。。。

「って、ちよつと待ったー!？」

勝手に殺さないでよ!？」

と、ナレーションに文句を入れる夏海。

だが当然のごとく皆にスルーされるのだった。

その後夏海は沈黙し、到着まで動くことは無かった。。。。

・  
・  
・  
・

・  
・  
ところ変わって歓迎会会場、という名のカラオケボックス。  
正直、金持ちにしては庶民的な楽しみを知っているな、と隆はこっ  
そりと感心していたりいなかったり。

「って、大きいトコですね・・・。」

そう、一般的なカラオケボックスと異なるところが2箇所だけあっ  
た。

そしてそれが『庶民的』という考えをすべて台無しにしてしまっ  
ている。

つまるところ、部屋が広いのであった。

ちいさなコンサートなら開けるのではないか、というほどのサイズ  
である。

本来、カラオケボックスというものはそこまで大きなものではな  
ったはずである。

そしてもう一つ、その大きなカラオケボックスのすべての部屋を貸  
切にしたのである。

ドコにカラオケに行つて全部屋貸し切る人間がいるだろうか。  
尤も、ここにいるのであるが。

「さて、久しぶりに歌うなー。」

と、割と普通な反応の夏海。

「ホント、久しぶりですー。」

今日は歌いますよー!ー!」

と乗り気な咲。

「・・・カラオケ、暗闇、密室。」

と不穏な言葉を呟く蓮。

「まさか歓迎会をカラオケボックスでやるなんて思わなかったわ。」

と玲は溜息をつきながら、備え付けのソファに腰掛ける。

脚を組み、髪をかきあげる様子は、やはりとても絵になる光景であった。

一瞬、隆ですら見惚れるほどである。

「どうかしたかしら、隆？」

と、固まってしまった隆に玲は問いかける。

話しかけられた隆は跳ね上がるように玲に目を合わせ、

「いや、なんでもありません。」

ただ、やっぱり玲は綺麗だな、と見惚れてました。」

と思ったことをそのまま告げるのだった。

完全に天然である。

ボンッ！

と、音が聞こえたかのように錯覚を覚えるほど、玲の顔は一瞬で真っ赤になった。

隆の言葉は真摯でいやらしさを微塵も感じさせなかった。

本心から言った言葉だったので当然ではあるが、だからこそ玲は素直にその言葉の意味を受け取ることが出来たのである。尤も、だからこそ真っ赤になるほど照れることになったのだが。

「どうかしましたか？」

あ、嘘ではありませんよ？

今でも力いっぱい抱き締めたいほどですから。」

と、玲に止めを刺しに行く隆。

しかし当然隆本人に自覚は無いのであった。

とてもたちが悪い天然である。

「ーーーーッ!？」

と、止めをさされた玲は、しばらく再起不能となるのだった。

・  
・  
・  
・  
・  
・

一方、傍にいたはずの夏海たちは、

「もー、自分達の世界に入らないでよねー。  
むず痒いったらありゃしない。」

と友人の変わりように苦笑をもらす。

「あの玲さんが、なんて意外ですねー。」

「・・・真つ赤。」

と、3人とも苦笑しつつも楽しそうに玲と隆を見つめるのだった。

学校へ逝こう！？ 歓迎会会場は

！？（後書き）

ちなみに分かると思いますが、サブタイの  
オケが入ります。^^ノ  
の部分にはカラ

学校へ逝こう！？終幕（前書き）

更新です^^ノ

もうすぐ期末テストです。

更新一時的にストップするかと思いますが、どうかご了承承ください。  
^^；

## 学校へ逝こう!？終幕

### 第22話『学校へ逝こう!？終幕』

「さて、ではそろそろお開きにしましょうか。」

隆の歓迎会という名目で始まったカラオケも2時間を超えた頃、  
そう玲が提案する。

確かに時間も7時をまわり、太陽は西へと沈み始めていた。

「そうですね、時間的にも頃合でしょう。」

「そうですね、あまり遅くなりすぎるのもアレだし。」

とその提案に賛同する隆と咲。

「え、まだ大丈夫じゃない？」

と駄々をこねる夏海。

そこに今まで黙っていた蓮が夏海の耳元へと口を寄せる。

「……夏海、映画によく出てくる皆の意見に反対したがる人みたい。

大抵の場合その人ってすぐに死ぬのよね……。」

そうボソツと不穏な発言をする蓮。

耳打ちの形をとってはいる。

とってはいるのだが、声の大きさ自体は通常の状態とまったく変わっていないのであった。

やはりこの蓮という少女、少々腹黒いところがあるようである。

「「「「「」」」」」」

（）（そ、それってこのまま行けば夏海が・・・）（）

そう、蓮の言葉に反応する隆と玲、咲の3人だった。

「夏海、帰りましょう。

お会計お願いね。」

そう玲は何事も無かったかのように夏海へと告げ、隆達3人を連れ店を後にしようとする。

そしてちゃっかりと会計も夏海へと押し付けるのだった。

どうやら先ほどの蓮の発言は聞かなかったことにする事に決めたようである。

隆と咲もそれが最善と考えたのか、何も言わずおとなしく玲についていく。

と、そこで玲の最後の言葉の意味に気づいたのだろう。

「「馳走様です。」

「「ゴチになりますっ!」

「「・・・ほとんど何も食べてないけど。」

と、3者三様の礼（1人おかしなのもいるが。）を言うのだった。

「なんか凄い理不尽な気がするけどっ！？  
そもそも何で私の奢りっ！？」

という夏海の声を背中に感じながら、4人は店を後にするのだった。

「今月ピンチなんだよー！？」

何か夏海が叫んでいるが当然無視である。  
その時隆は、

（協調性が無い者には罰が必要、ということか。  
なかなか正しい判断じゃないか、玲。）

と一人ズレた事を考えていたとかいなかったとか。

後日、夏海は節制をすることになるのだがそれは別の話であった。 1  
正直どうでもいいことである。

・ ・ ・ ・ ・

場所は変わって帰りの車の中。

「今日はありがとうございました、皆さん。」

と4人に礼を述べる隆。

突然頭を下げる隆に3人は戸惑いを隠せない。

そんな中、玲だけはいつも通りの表情で隆を見るのだった。

「い、いいえっ！気にすることなんて無いですっ！

私達も楽しかったですからっ！」

と見てすぐに分かるほどに慌てる咲。

「な〜に〜、隆くんそんなに畏まらなくてもいいのに。」

と少しおちよくなるように言う夏海。

ただし、右手は髪を弄っていた形で固まっている。

やはり突然のことに驚いているようである。

「・・・やりたくてやっただけ。」

と、表面上は無関心に答える蓮。

ただ、目は虚空を泳いでいる。

そんな3人の反応に苦笑する玲。

そして玲が口を開く。

「3人とも何をそんなに慌ててるのよ。

隆はただお礼を言っただけじゃない。

隆もそんなに畏まらなくてもいいのよ？

私達も楽しんだし、やりたくてやっただけなんだから。」

的確な言葉に4人は顔を見合わせ、1つ溜息をつくのだった。

「やっぱり玲さんは凄いですね。」

「こづいことは玲ってしっかりしてるって言うかなんというか。」

「・・・降参。」

「流石玲、的確だよホント。」

と4人は賞賛の声を上げる。

「やめてよ、そんな大した事じゃないんだから。」

と玲は居心地悪そうな様子でそういった。

と、そこで隆があることに気がつく。

「そういえば咲さん、なぜ玲には敬語なんです?」

と、会った時から咲が敬語だったことを思い出す隆。

その疑問に反応を示したのは、咲ではなく夏海と玲だった。正確には咲も反応しようとしたようではある。

しかし夏海と玲に先を越され、言い出すことが出来なくなってしまったのだった。

「あのね、隆くん、玲が学園でなんて呼ばれてるか知ってる?」

と夏海が言う。

「ちょっと夏海、やめなさい。」

とそれをとめようとする玲。

なぜかその表情には焦りが見え隠れしているように隆には思えた。

「え？

ええ、確か氷姫でしたっけ？

クールな上に美しい玲にはピッタリな呼び名だと思いますが。」

と真顔で返す隆。

ボンッ！

っと思ってもよらない唐突な賛辞に顔を赤くさせる玲。

「な、何か釈然としないものがあるけどまあいいわ。

そう、その氷姫っていう呼び名は結構有名なの。

下級生は勿論、同級生にまでもね。

それに加えて、超優秀な能力者。

ここまで言えば分かると思うけど、普通の生徒にとっては憧れの対象なわけ。」

と玲が止める暇も与えず、早口にすべて話し終える夏海。

というよりも恥ずかしさに止めるのを一瞬忘れてしまった、というのが正しいのだが。

「……私達は一般教室の生徒だから、憧れを抱く。」

と、またも無表情に、それでいてちゃっかりと会話に入り込む蓮。

「私や蓮みたいに、普通に反応する生徒のほうが珍しいのよ、実際。」

と夏海が締め括った。

「なるほど、理解しました。」

でも玲はそんな扱い嫌いだとおもっているが？

と尤もな意見を言う隆。

「いいえ、そうとも限らないわよ？」

下手に近づかれるよりも、遠巻きに見られるほうが面倒が少なくなっている。

正直あまり人とかかわりたくないのよ、私。」

と答える玲。

その言葉をきいて表情を暗くする咲。

その表情をみた隆は流石にかわいそうだと思ったのか、玲を咎める様にこういった。

否、言おうとした。

「玲、流石にそれは言い過ぎじゃ」「でもないk」

隆の言葉をさえぎるように言葉を紡ぐ玲。

玲はどこか恥ずかしさを隠すように視線をそらし、虚空を眺めながらこう続けた。

「でも、咲と蓮なら私は付き合っていきたいと思うし、既に友人だ

「思っているわ。」

と。

そう発言した玲の横顔は西日に照らされ、高揚した顔をうまく隠してくれている。

玲はそのことにすこし安堵を覚えながら、窓の外を眺め続けるのだった。

「あ、ありがとうございます！」

と、先ほどまでの暗い表情はどこに消えたのか、喜びに軽く涙を流しながらそういう咲。

正直隆にとっては、『何を今更……。』といった感じである。

しかし咲本人にとってはそれほど予想外のことであり、とても嬉しいことだったようである。

「ホント玲って、こういうことは下手だよね。」

「いや、まったくですね。」

と夏海と隆。

「……これにて一件落着。」

と、時代劇風に言ってみせる蓮。

その様子には皆は笑い、玲はさらに顔を赤く高揚させるのであった。その時の玲は『西日が強くてよかった……。』と思っていたとか。

やはり彼女、人前ではクールを演じようとしているようである。

本来の彼女は、クールというよりは可愛いタイプなのだが。

隆以外の人間にそれを知られたく無いようだった。

玲自信、そう考える理由は理解していないようであるが。

そうした和気藹々とした空気の中、帰りの車は強烈な西日を浴び公道を走り続ける。

車体をオレンジ色に光らせながら・・・。

学校へ逝こう！？終幕（後書き）

感想＆評価お待ちしております！^^^ノ

23話：執事としての仕事、始動！前触れ編（前書き）

お久しぶりです！

やっと受験もひと段落着きました。

・・・結果がどうなるかはアレですが。

え、これでまた執筆に戻れると思います。

ただ、バイト始めましたので少々遅くなるかも^^；

## 23話・執事としての仕事、始動！前触れ編

第23話『執事としての仕事、始動！前触れ編』

歓迎会という名のカラオケから1週間。

月の4分の1を消化し終えたある時、清から呼び出しがあった。尤も、玲を通じての言伝ことづてではあったが、玲が言うには、

「お父様が隆に話があるみたい。もく、忙しいからって私を電話代わりにしないでよね……。」「  
だそうだ。

ちゃっかり『玲・プライベートモード』（口調が変わる）になっている所を考えると、いつの会話かは押しして図っていただきたいと思う。

玲としては、せつかくの2人での時間を割かれるのが嫌だった様である。

まあ、突然呼び出されたかと思えば自分に用事があるのではなく伝言を頼みたい、などといわれては仕方が無いのかもしれない。

・・・尤も、伝言という用事なのであるが。

そんなわけで、呼び出された隆は夕食後、清の書斎へと足を運んでいた。

途中玲に逢ったが、何やらブツブツと考え事をしているようで、どこか上の空のまま挨拶を交わし、すれ違ったのみであった。

玲のことだからついてくると思ったんだが・・・、何かよからぬ事を考えていなければいいが・・・。

そう俺は一抹の不安を覚えながら、清の書斎への廊下に行く。

「はあ、ケータイでも買うべきかもしれないな。

流石に連絡が取れないというのは執事としていろいろと問題があるだろうし・・・。」

そう1人ぼやきながら廊下を歩いていると、目の前に1人の少女が所在無げに立っているのが目に入った。

この屋敷に来てはじめてみる顔である。

まあ、俺自身1週間程度しかいない身なので、まだ会っていない人間はいるのかもしれないが。

無論、黒崎家の人間という線もあるにはあるが、それにしてはこの時間帯にここにいるのは妙である。

一番可能性が高いのは、使用人という線か。

「どうかされましたか？」

そう言っただけ俺は、少女へのファーストコンタクトを試みるのだった。

「あ、え、えつと私、こ、この家で使用人をさせて貰うことになりました、神崎歩かんだまあゆみといいます！」

よ、よろしくお願いします！」

そう少女は慌てながらも自己紹介し、隆へと深く腰を折るのだった。

「ああ、よろしくおねがいします、神崎さん。  
突然話しかけてすみません。  
見ない顔でしたのでつい。」

私の名前は 逆神 隆 と言います。  
いろいろと大変ではあるでしょうが、頑張ってくださいね。」

その答えを聞いた俺は、自身の予想が正しかったことに内心ほくそ  
笑みながら、少女へとそう言った。

「あ、あの、ありがとうございます！  
えと、し、失礼ですが貴方は？」

少女はあたふたとしながらも、俺へと質問を始める。

「私ですか？  
そうですね・・・、名目上は執事ということになっています。  
尤も、今の仕事は殆どが玲お嬢様の護衛ですが・・・。」

俺は苦笑交じりにそう答えた。  
内心、言われてみれば、執事らしいことはまったくやっていないな。  
・・・、と言う事実には少し驚きを覚えていたのだった。  
勿論、その動揺を表に出すような悪行はしないが。

「では、私はこれで失礼します。  
主人に呼び出しを受けまして、今から書斎へといくことになってい  
ます故。」

ああ、そのこの階段を下りればリビングへ出られますよ。  
その者にも詳しいことは聞いてください。」

そう言うと俺は、書斎のほうへと消えていったのだった。

余談ではあるが、今リビングにいるのは玲と玲の母親である沙里の2人だけである。

神崎と名乗った少女には、少し肩身の狭い思いをさせることになるかも知れないが、仕方が無いことだと割り切ることにする。

「それにしても、執事、なんだよな、俺。

まったく実感が湧かん・・・、まあ、玲がいいと言っているのだからあまり気にしないことにしよう・・・。」

そう俺は（半ば無理やり）思い直すと書斎へと歩いていくのだった。

・ ・ ・ ・ ・

コンコンッ

「逆神です。

お呼びでしよつか？」

書齋の扉をノックし、声をかける。  
時間があまり早くない為、音量は控えめにしている。

「おお、隆か。

入ってくれ、鍵は開いている。」

そう、中から清の声が聞こえてきた。

どうやら立て込んでいるらしい。

以前1度来たときは、清本人が扉の前まで来て扉を開いていた。

「失礼します」

その程度の些細な違いに俺がどうこうなるはずもなく、普通にそう言う。

そして俺は清の書齋への扉を開くのだった。

・ ・ ・ ・ ・

ボタンッ

扉の閉まる音が書斎に響き渡る。

見ると、清はパソコンの前で難しい顔をしているのだった。

「呼ばれたからきたぞ？」

扉が閉まったのを確認した俺は、清へと素の口調でそう聞いた。

基本的に、俺の素を知るもの以外の人間がいる場合は敬語を使うことにしている。

「はははっ、相変わらず変わり身の早いヤツだ。

まるで二重人格だぞ？」

清もそれを気にすることなく、普通にそれに反応するのだった。

雇い主と言う立場であるにも拘らず、こういった口調で話しかけられてもいやな顔をしないところを見ると、内心敬語ばかりの生活に疲れているのだろう。

と、俺は予測している。

尤も、本当に気にしていない可能性のほうが高いが。

「ふん、何を今更。

出会った当初からこうだっただろう、今この状況のほうがよっぽど異常なのさ。」

そう言いながら、俺は肩をすくめる。

「確かにそうかも知れんが。

まあ、別に直せと言っているわけではないよ。

・・・尤も、場所は弁えて貰わねば困るが、隆なら大丈夫だろう？」

と清は意味深な目を俺に向ける。

実際、清はそういう点で隆のことを問題ないと判断している。尤も、それでも雇い主に敬語を使わない人間など、普通は存在しないのだが。

「まあな。

で、一体何のようなんだ？」

と、早々に話を切り出す。

この為に玲を言伝に使ったのである、俺としては早くその内容を知っておきたい。

「いやなに、そんなに大したことはないんだがね？」

そろそろ生活にも慣れてきたことだろうし、執事としての仕事もこなして貰おうかと思ってね……。」

と切り出すのだった。

正直、俺としても先ほど考えたところだったので、少々驚きを隠せない。

尤も、例のごとく表には微塵も出さないが。

「なるほど、確かに頃合かもしれないな。

むしろ少し遅すぎたぐらいだ。」

「うむ、まあ、何も考えずにこの時期にしたわけではないんだ。

確かに隆にはこの生活に慣れてもらわねば困るから、その調整のためというのは嘘ではないが。」

つまり清は、それ以外にも理由がある、と言っているのだ。

「まあ、簡単に言うと今回新たに玲専属の使用人を付けることになった、ということだ。

無論、隆も玲専属となる予定ではある。

だが、執事とは本来使用人の上に在るもの、すべての使用人に指示をだす権限があたえられる者だ。

玲専属でありながら、屋敷全体の使用人を管理してもらうことになる。」

ようは流石に手が回らないのではないか、と心配したのだと俺は推測を付ける。

「尤も、我が屋敷に限って言えば、使用人の数は極力少なくしてある。

コック3名と屋敷を管理するために必要な人員6人、それに今回雇った者の10名だ。」

「ふむ、分かった。  
努力しよう。」

やはり少人数であっても、統率するためにはある程度のことは出来るようになっておかなければならない。

明日からその辺りについて確認するように、ということだろう、と俺は予想をたてる。

「玲は君をとてても信頼している。

しかし玲も年頃の女の子だ、色々と隆では対応しきれない状況が起こらないとも限らない。

よって使用人を新たに雇うことにした。

詳しくはまた後日通達をだすから、今日は戻っていいぞ。」

そう清は告げると、再び机のパソコンへと向かうのだった。

「では、失礼します。」

隆はそう言っつて、静かに書斎を後にするのだった。

余談だが、書斎では清が、

「むう、このままでは終わらん・・・、明日の会議で使うのだが・・・。

まあ、いいか。」

「あゝな〜た〜!?!?」

「なっ!?!? 沙里!?!?」

「サボらずにしっかりとやりなさい!?!?!  
社長と在ろう者が情けない!?!」

沙里に怒鳴られていたとかいなかったとか。

**23話・執事としての仕事、始動！前触れ編（後書き）**

え、今回からサブタイの書き方を変えました。

一目で何話目かわかるよう、初めに話数を入れます。

何か見づらいなどあれば報告下さい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8523e/>

---

超能力者の仕事は・・・執事！？

2010年10月20日19時54分発行